第２４回
戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集《第１９集》

さとうきび畑

作詞・作曲　寺島　尚彦

ざわわ　ざわわ
ひろい　さとうきび畑は
ざわわ　ざわわ
風が通りぬけるだけ

今日も見渡すかぎりに
みどりの波がうねる
夏の日ざしのなかで

ざわわ　ざわわ
ひろい　さとうきび畑は
ざわわ　ざわわ
風が通りぬけるだけ

昔海のむこうから
戦さがやってきた
夏の日ざしのなかで

ざわわ　ざわわ
ひろい　さとうきび畑は
ざわわ　ざわわ
風が通りぬけるだけ

あの日鉄の雨に撃たれ
父は死んでいった
夏の日ざしのなかで

ざわわ　ざわわ
ひろい　さとうきび畑は
ざわわ　ざわわ
風が通りぬけるだけ

そして私の生れた日に
戦のおわりがきた
夏の日ざしのなかで

ざわわ　ざわわ
ひろい　さとうきび畑は
ざわわ　ざわわ
風が通りぬけるだけ

風の音にとぎれて消える
母の子守の唄
夏の日ざしのなかで

ざわわ　ざわわ
ひろい　さとうきび畑は
ざわわ　ざわわ
風が通りぬけるだけ

知らないはずの父の手に
だかれた夢を見る
夏の日ざしのなかで

ざわわ　ざわわ
ひろい　さとうきび畑は
ざわわ　ざわわ
風が通りぬけるだけ

父の声をさがしながら
たどる畑のみち
夏の日ざしのなかで

ざわわ　ざわわ
ひろい　さとうきび畑は
ざわわ　ざわわ
風が通りぬけるだけ

お父さんて呼んでみたい
お父さんどこにいるの
このまま　みどりの波に
おぼれてしまいそう
夏の日ざしのなかで

ざわわ　ざわわ
けれど　さとうきび畑は
ざわわ　ざわわ
風が通りぬけるだけ

今日も見渡すかぎり
みどりの波がうねる
夏の日ざしのなかで

ざわわ　ざわわ
忘れなれない悲しみが
ざわわ　ざわわ
波のように押し寄せる

風よ　悲しみの　歌を
海に　かえしてほしい
夏の日ざしのなかで

ざわわ　ざわわ
風に　涙は　かわいても
ざわわ　ざわわ
この悲しみは　消えない

ところ　緑生涯学習センター
月・日　平成２４年７月７日
戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

目次

レジュメ　父の手紙から戦中・戦後の遺族の生活を見る　語部　緒川　文子　1頁
レジュメ　十九歳で陸軍に志願中国戦線へ派兵さる　語部　伊藤　芳雄　2頁
レジュル　母二十四歳・私四歳を残し父は戦病死　語部　速水　民子　3頁
レジュメ　見よう　学ぼう　考えよう　平和のこと戦争と平和の資料館〝ピースあいち〟　語部　小島　久志　4頁
飛行場の思い出　白石　英一　5頁
今想う『祖父の無念さ』　斎藤　艾出　6頁
名古屋は一晩中燃えていた　佐藤　国枝　8頁
恐ろしかった戦争　孫たちへ　森村　匡伺　9頁
夏の日に思う　杉村　征郎　9頁
戦争は体験していないけれど　加藤洪太郎　11頁
私の「8・15」前後　湯浅　俊彦　13頁
シベリア捕虜の頃　橋詰　四郎　15頁
罪状示さず　懲役二十五年シベリア鉄格子の中で　小池　義人　19頁
平和になってから満州に見捨てられた〝棄民のあしあと〟　夏梅　誠一　28頁
特攻出撃前の頭の中　稲葉　迪夫　46頁

父の手紙から
戦中・戦後の
遺族の生活を見る

緒川　文子

昭和十八年に父は赤紙召集で出征しました。三十一歳でした。残された家族は、母と六歳の姉を頭に、お腹の中の弟を入れて五人です。

父は中国南北を縦断する長沙・桂林・柳州（りゅうしゅう）の粤漢（えつかん）鉄道を攻略する湘桂作戦に参加しました。日本軍はマラリヤ・コレラなどの伝染病と、食料は現地調達で地元の人達の略奪などで飢えをしのいだようです。父はこまめに絵手紙でお正月、国慶節を祝ったとか、桜が咲いた、麦の穂が青くなったとなど知らせてきていました。

母からは少年院（父の職場）からの立ち退きや、こども扶助料が削減されたなど、とほうにくれた生活苦の手紙が送られていたようです。

父は、腿を弾が貫通、野戦病院から南京の陸軍病院へ移り、そこで昭和十九年十月四日戦傷死しました。

母子家庭の生活は悲惨です。私たち姉弟は、よく働き、実家の援助を受けながら、生計を立ててきました。恩給が再開されたのは、その子どもたちの成人真近でした。

憲法九条は戦争遺児にとって、父からの遺言状です。二度と私たちのような遺児を出さない為に、私は平和憲法を守る運動で頑張っています。

母は二十五年前に亡くなりましたが、姉弟は皆元気で、思い思いの生活をエンジョイしています。

語り部　伊藤　芳雄

戦争に負けるまで徴兵が国民の義務でした。
私は義務年齢前軍隊へ志願し、甲種合格兵隊になりました。
日本は大命のまま国家の方針に従って戦争をしてきましたが、
二度と戦争に巻き込まれたくありません。
戦争は敵味方どちらにとっても悲惨であり、地獄絵巻です。
私は兵士として、戦場の姿を見、また体験をしてきました。
今思うと、沖縄のように、日本各地にアメリカ軍やソ連など、連合国軍が上陸して、日本各地で沖縄のように攻防戦が繰り広げられていたらと思うと、恐ろしくなります。
而しその前に惨い原子爆弾を広島、長崎に投下された事により、天皇始め、軍部、その他上層部の人達の、思いが変り降伏、そして平和になりました。
今は、負けたお陰で、平和で豊かな国になりました。
その陰には、死にたくないのに戦争で殺された人達大勢の犠牲のお陰を、生涯忘れてはいけません。
私達の年代は巧みにだまされて戦争に加担しました。
戦争をしたい人は上手に私達をだます。
マインド・コントロールされないように注意、警戒。
戦争反対！
平和が一番！
世界の願望！
日本の宝！
憲法九条を守ろう！

語り部　速水　民子

①昭和１５（１９４０）年、日中戦争に徴兵されていた父は、２９歳で戦病死した。その時、母２４歳。私４歳。妹は母の胎内にいた。父は、大日本帝国憲法によって、２０歳から死ぬまでの８年間を国の命令で（戦争と云う殺人行為のため）軍隊と軍属で働いた。逆らえば（国賊）として処罰された時代だった。

②昭和２０（１９４５）年３月１２日、祖父母と私は名古屋市昭和区東郊通りで爆撃にあう。アメリカのＢ２９の空爆で、ついに我が家が焼き尽くされる日が来た。鶴舞公園に逃げて、命を拾った。翌朝見ると名古屋の中心部は見渡す限り、焼け野が原だった。まだ熱い炎と異臭の焼け跡に立った。

一週間後の３月１９日、身を寄せていた熱田区の叔母の家で、再度空襲にあい、逃げ惑った。私は、高辻国民学校から学童集団疎開に行っていたが、病気で自宅に戻されていたので、最悪の事態に遭遇したわけだ。私は、戦時のドサクサで小学校３年生の授業はほとんど受けていない。

戦時一般庶民は、どこもみな貧しく、いつもひもじく、お腹を空かしていた。着るものも、食べるものも僅かな配給で我慢してしのいだ。

数ヶ月後に、原爆が落とされるというのに、Ｂ２９の空襲に対抗して町内では婦女子がバケツリレーで『消火訓練』。日本に上陸して攻めてくるアメリカ兵を、１人でも多く突き殺せと『竹槍訓練』をさせられていた。

子どもの頃を振り返ると、敗戦時「日本人は１２歳」と比喩したマッカーサ日本占領軍最高司令官の言葉に「それ以下だったのでは？」と思う。

嘘の大本営発表や、国の圧制は恐るべき時代だった。この愚かな体験から、私達は強く反省し、不戦を誓ったのが『憲法９条』だと思う。

③その後、今の北名古屋市辺りの知人の家にお世話になり、そこから滋賀県東浅井郡（現長浜市）まで、大八車に家財道具を積み、引いて押して３泊４日、野宿やお寺に泊めて貰って逃げのびた。

見よう 学ぼう 考えよう
平和のこと
”戦争と平和の資料館 ピースあいち“

語り部　小島　久志

戦後七十年近い歳月が流れ、戦争体験者は年々少なくなり、戦争の遺品や資料も失われていきます。

「戦争と平和の資料館ピースあいち」は、国の内外に大きな犠牲を強いた“さきの戦争”を歴史の教訓として、後世に伝え。次世代の平和に役立てる目的で、二〇〇七年五月四日に開館しました。

「戦争と平和の資料館ピースあいち」は、九十余名のボランティアで運営され、昨年（二〇一一）八月には、愛知県教育委員会から「博物館相当施設」に認定されました。

そして二〇〇九年七月に発足した「ピースあいち語り手の会」では『平和学習支援事業』として、昨年度実績で「語り手」延べ六十九名が、六十二学校・団体の三，二〇〇名に『体験話し』の出前活動を実施しました。

また本年五月、開館五周年事業の一環として、一階展示「現代の戦争と平和」をリニューアル映像用大型モニターも常設しました。

その他、図版・年表・写真を多用した明るい展示が、親しみやすい　分かりやすい　と、好評をいただき、来館リピーター増につながるものと、期待しておりのます。

※戦争と平和の資料館ピースあいち
ところ　名古屋市名東区よもぎ台二丁目八二〇
☎ FAX　〇五二ー六〇二ー四二二二
交　通　地下鉄駅　一社　下車①出口　北へ徒歩十二分
入　館　十一時～十六時
休　日　日曜日　月曜日　年末年始ほか
料　金　大人　三〇〇円　小中高　一〇〇円

◎正義と平和に働く人達を顕彰する　第六回アロイジオ賞に二〇一一年六月十八日顕彰されています。

飛行場の思い出

白石　英一

名古屋市の南、稲永公園の辺りは戦争中は海軍の飛行場でした。私は気象予報官で、この飛行場の気象観測をしていました。艀（はしけ）で運ばれてくるゼロ式戦闘機が、観測舎の前から、白子（対岸三重県）の海軍航空隊へ飛び立つのをよく見ました。兵隊さんが飛行機の車輪に、ロープで結んである三角の木製歯止めをしてからエンジンフル回転。飛び立つ寸前にロープを力強く引くと歯止めが外れ、飛行機は勇ましく飛び立つて行きました。

戦争に敗けるとは思っていませんでした。滑走路南端の岸壁に生息している牡蠣を採り、海水で洗ってよく食べました。今は汚染されているので食べられないと思います。風力塔に雀が巣を作り、卵を失敬して食べもしました。食べ物が少ない時代だったので、大変なご馳走でした。今、その場所を探しに行っても判らないと思います。当時は軍用地で立入禁止秘密の場所で一般の人には知らされていませんでした。

戦争が終りアメリカ軍が小牧飛行場に空軍基地を置いたので、私も小牧飛行場の気象観測をすることになりました。夜、B29が飛来し、数人のアメリカ兵が観測所（私の職場）に入ってきたので、殺されるかもと思いました。何事もなく朝になり、夜は暗くてよく判らなかったB29の全体像に驚きました。怪物のような巨大飛行機に立ち向ったパイロット達は、死ぬ覚悟だったと思いました。このB29にはミッキーマウスの絵が描いてありびっくりしました。戦争をスポーツ感覚で、とも思いました。B29は飛び立つ時、日本のように歯止めは使わないのです。今では当たり前ですが、アメリカの高い技術に感心して、これでは戦争に勝てる訳がないと、改めて思いました。この巨大な空の要塞B29が名古屋を始め多くの日本の都市を焼き払いました。油脂焼夷弾が落ちてくると、竹の先に巻き付けた縄で火を叩いて消せと言うのですが、何の役にも立ちませんでした。全く無謀としか言いようがありませんでした。

食料がなく、すいとんや豆粕、大根の葉っぱや南瓜の茎、食べられる野草を探して食べていましたが、小牧飛行場勤務中は、ご飯を食べれたし、煙草、飴玉も貰いました。世間では手に入らないものを手にして、ひとときを楽しませて貰いました。

“欲しがりません勝つまでは”空しい標語に振り回された戦争でした。

今、想う『祖父の無念さ』

斎藤　茂

昭和十七年生まれの私は、私自身の戦争の記憶より、戦争で荒々しくなった戦後の殺伐とした社会の記憶が残っている。先日も近くの小公園に行くと、花壇に手入れされた花々が競うように咲き誇り、ペットと戯れるご母子の姿に平和っていいなーと、独言。

私の記憶の戦後は薯畑、駅前や街頭で物乞いする傷痍軍人。配給品を貰いに並ぶ人の列。晴着や家の御宝と交換した食料を「お巡りさん」に没収されないように怯えている主婦達。生きるために人々は殺気立っていた。戦後二十年近く経ち、世の中が少し落ち着き始めた頃。私の友人は「母子家庭」の理由で銀行に就職できなかった。学力も性格も優秀な友人であったのに。お父さんの戦死で「母子家庭」にされたのに、国の為に戦い命を奪われ、片親にさせられた子どもが差別を受けるのか、私は彼女のために涙し、一緒になって戦争を呪い憤りを覚えるようになった。

反面私は、戦争に怒りを覚える片方で、母の実家（大阪のおじいちゃんと呼んでいた）に行くと、軍服姿の叔父（母の弟）の写真が仏壇の上に天皇陛下の写真と並んで掲けてあり、凛々しい姿に誇らしく思っていた。今思うと、ふたつ心であり不思議に思う。祖父母も叔父については何も語らなかった。母さえも「弟は特攻隊で戦死した」としか語るだけで。祖父母は息子の、母は弟の多くを語らず歳月が流れた。

祖父の家は今様に建て替え、新しい部屋に似合う仏壇と話が出た時、寡黙な祖父は仏壇仏具はそのままと一言。祖父母の我が子えの深い強い愛情を知らされました。子を立派に育て上げ。孫も生れ、念願の三世代平穏な生活を奪った戦争。地元は称え新聞は名誉と書き（次頁参照）泣くことも許されない悔しさを仏壇仏具、そして墓石は御祖先様より高く立派に。逆縁死への無念をこの三点に託していたことを、初めて知らされました。

この処よく友人知人の墓参にあちこち出向くことがあります。どの墓地にも、一段と高い墓碑が林立しています。その都度、祖父母の我が子への、母の弟への同じ思いの夥しい数に悲しみを覚えています。

二度と再び高い墓碑の建立しない平和な国をと願って。合掌。

昭和十四年（１９３９）七月六日
大阪朝日新聞の記事

中田少尉（玉川）
名誉の戦死

中河内郡玉川村大字瓜生堂、中田正雄少尉はバイアス湾敵前上陸、廣東攻略に武勲をたてさらに汕頭方面で活躍中、去月二十四日名誉の戦死をしたと、五日公電があった、同少尉は元大阪工廠工員長中田耕作氏の一人息子で府立高津中學、早大政經科を卒業、出征前まで大阪北濱岩本證券株式會社現物部長をつとめてゐた、在學中はホッケー選手として活躍した明朗青年で村ではただ一人の少尉さんとして評判であった

家庭には厳父耕作氏、母堂きぬさん、夫人美鶴さん、長男昌之君（六年）次男征二君（三年）があり、征二君の名は同少尉が出征の決意のほどを示して壮途にのぼる前につけたものであった

大阪朝日新聞の記事（昭和十四年七月六日）

中河内郡玉川村大字瓜生堂、中田正雄少尉はバイアス湾敵前上陸、廣東攻略に武勲をたて

昭和十四年（１９３９）七月六日
大阪朝日新聞の記事

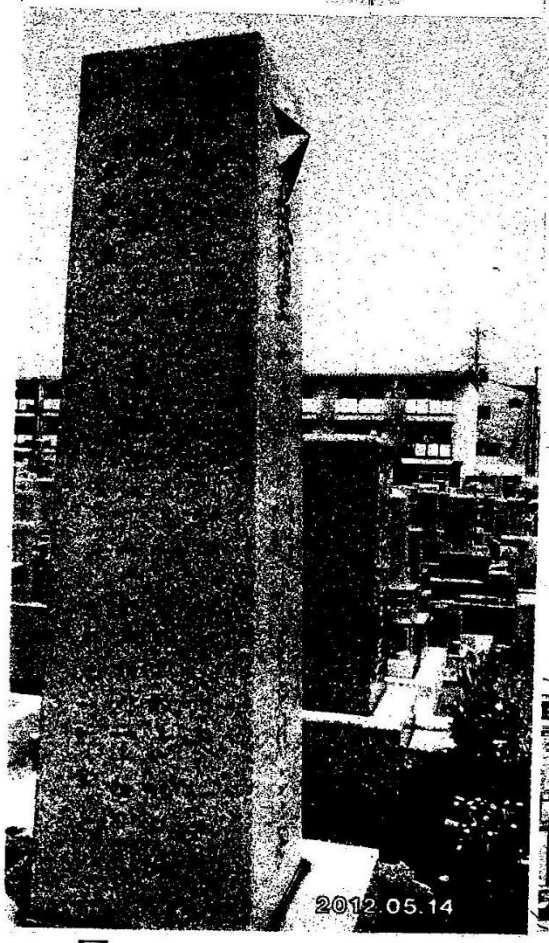
中田少尉（玉川）
名誉の戦死

中河内郡玉川村大字瓜生堂、中川正雄少尉はバイアス湾敵前上陸、廣東攻略に武勲をたて、さらに汕頭方面で活躍中、六月二十四日名誉の戦死をしたと、五日公電があった。

同少尉は、元大阪工廠工員長、中田耕作氏の一人息子で、府立高津中学、早大政經科を卒業、出征前まで大阪北濱岩本証券株式會社現物部長をつとめてゐた。在學中はホッケー選手として活躍した明朗青年で、村ではただ一人の少尉さんとして評判であった。

家庭には厳父耕作氏、母堂きぬさん、夫人美鶴さん、長男昌之君（六年）征二君（三年）があり、征二君の名は、同少尉が出征の決意のほどを示して、壮途にのぼる前につけたものであった。

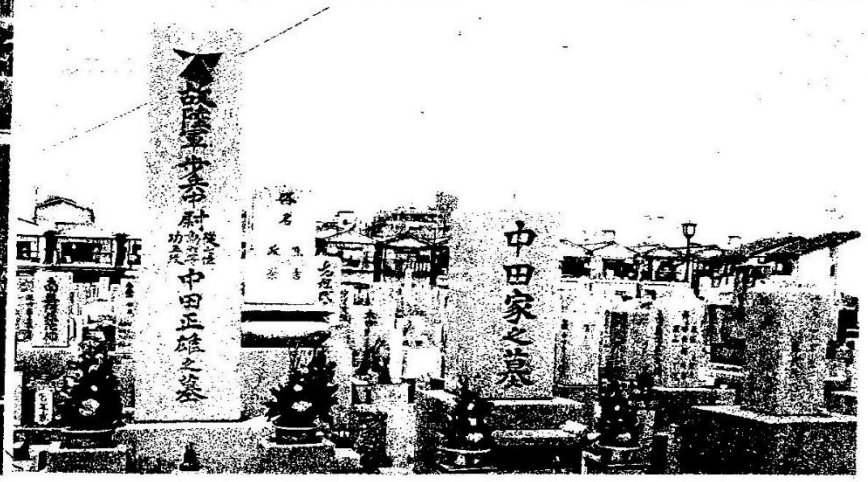
享年３２歳・廣東＝カントン・汕頭＝スリトウ



枯れ墓地や
高き碑はみな
兵士の

天皇の命令で戦死した誇りを、ご遺族は周囲の墓碑より高く建立し、逆縁を祈った。

写真提供　斎藤　出



名古屋は一晩中燃えていた

佐藤　国枝

昭和十六年（１９４１）十二月八日（七十年前）私は小学校五年生でした。岐阜県西部の山間部の学校で、朝礼で校長先生が「今朝七時のラジオで米英国と戦争になったと放送がありました。みなさんも一生懸命勉強して、お国のためにお役に立つ人になって下さい」と。全校生徒直立不動で聞いたのは、今でも忘れられません。

それからは英語の教科書も墨で真っ黒に消し、「欲しがりません勝までは」のポスターが貼られ、全国民総動員へ突入していきました。衣服も食料も配給制度になり、母の着物で洋服やモンペ、足袋も手作り、靴はなく自分で藁草履を作り質素な日常生活でした。

昭和十八年高等科（現中学一年）へ進学すると、出征兵士が乗車する近鉄養老線駒野駅まで、日の丸の小旗を振りつつ軍歌を歌って、出征兵士と一緒に歩いてお見送りをしました。十三歳になりました。学校は勉強はなし、運動場を農地に開墾して野菜や薩摩芋を植え食料増産に励みました。十九年になるとアメリカのＢ２９爆撃機よる空襲が激しくなり、海津市の上空をＢ２９が編隊を組んで名古屋へ向かうのを寒空に震えながら見上げていました。名古屋の空が真赤になり一晩中名古屋は燃えていました。

十三歳の私も戦争をする武器を作る工場、東洋ベアリング工場へ学徒動員され、戦闘帽を被って工員さんに混じって、お国の為に勝つことを信じて皆一生懸命働きました。名古屋方面から空襲で家を焼け出された人達が、着のみ着のままで大勢避難してきて、鶏小屋にも住んでいました。道端のタンポポ、セリ、食べれる草はなんでも食べました。農薬もない頃なのでよかったです。今思うと人間はどんな事態に直面しても家族を守り、隣近所と助け合い、すごい知恵と工夫、体力、絆で生きられるんだと、つくづく思います。

戦争は国民に嘘を教え、本当の事を隠すのです。情報も少なくなり校長先生が「戦争は我が方の損害軽微です」と、教えてくれるだけです。名古屋や大都市が空襲で燃え、戦死した遺骨を駅へお出迎えに行く回数が増えているのに。損害は軽微と発表していました。

私も八十一歳になりました。今、平和な時代、豊かな時代を戦争に怯えることもなく、幸な日々に感謝すると共に、多くの方々の犠牲のお陰を生涯忘れずに、戦争の悲惨さを伝えていきます。

恐ろしかった戦争
孫たちへ

森村　匡伺

私は昭和１１（１９３６）年生まれの７６歳です。おじいちゃんの小さい頃、ずーっと日本はアメリカと戦争をしていたのです。その頃、おじいちゃんの家は、名古屋市中区東新町にありました。昭和２０（１９４５）年３月２４日、アメリカのＢ２９と云う爆撃機２２６機が名古屋を空襲して、１，６１７人殺され、怪我をした人は７７０人、燃えた家が７，０６６戸で、おじいちゃんの家も燃やされてしまいました。その時、おじいちゃんは９歳で小学２年生でした。

小学３年生から上の学年は、名古屋は空襲されるので、空襲されない遠い田舎へ集団学童疎開をしていて、学校は１年生と２年生だけでした。

おじいちゃんの記憶では２月１５日、この日の空襲はＢ２９爆撃機１０１機、６１人殺され、怪我をした人５２人、燃えた家７０９戸の被害を受けました。おじいちゃんは学校にいました。空襲警報のサイレンが鳴って、防空壕にみんな逃げたのですが、１年生の子が１人いなかったので、先生が運動場にさがしに行って、爆弾で殺されました。悲しかったです。

家が燃えた時、鶴舞公園に逃げたのです。逃げる道は両側の家も燃えていて、道は火の海になっていました。水で濡らした毛布を頭からかぶり、頭や体が燃えないようにして、おじいちゃんのお父さんと、お母さんと、タキおばさんの４人で逃げました。次の朝、燃えていない親戚の家を探して行きました。道には空襲で死んだ人や、逃げていて火に巻き込まれ、焼け死んだ人がたくさんありました。警防団の人が片付けていました。濡れた毛布をかぶっていなかったら、おじいちゃんもこのように死んでいたと思います。

夏の日に思う

杉村　征郎

本格的な夏がやってきた。

縁側の椅子に腰掛けコーヒーを飲みながら、朝刊を読む、時折庭に目をやると、朝日に照らされた緑が鮮やかに映えている。木々の葉陰が涼やかな風を送ってくれる。気が付くと蝉時雨。新聞を読み終わる頃には、太陽が猛々しく光の粒を撒き散らす。毎年、夏の盛りには決まって戦争のことを考える。日本史上未曾有の戦いが終り、暫くしてシベリア抑留から帰った父の膝に恥かしげに抱かれたのは、小学校に入学する頃だった。

物心がつき、やがて多感な思春期を迎える過程の十年余。私は大人達とは別の戦後の混乱期を経験した、と思う。私にとっての戦後の原点は、貧乏と食料難によるひもじさだった。小学校二年生の時、占領軍供出の給食脱脂粉乳を腹を空かせている弟のため、アルマイト容器からこぼさぬように、大事に歩いたのに、半分はこぼしてしまった惨めさは、今でも忘れられない。

その頃、傷痍軍人がいた。托鉢僧のように我が家にくると、母はお櫃からなけなしのお米を施してお櫃を空にした。昭和二十四年、父は国策会社理研から退職金代わりに貰った旋盤一台で起業する。家族のため一生懸命働く父の背中を見ていたから、貧しいながらも楽しい我が家であった。小学五年生の頃、母の内職のサッカリン「砂糖の代替品」の分包を憧れていた子の家に売りにいって、買って貰った。その子の母親に誉められたことが嬉しかった。冬の早朝の新聞配達、牛乳配達、納豆売りも苦にはならなかった。継ぎはぎの兄のお下がりを着せられ、「東海道五十三ツギ」と囃子られたり、学級費の延納願いを黒板に貼られたり、大喧嘩をしたりもした。

貧しい家庭だったが貧しさを恥ずかしいとは思わなかった。学校図書館の沢山の本を夢中になって読んだりもした。先生の中には、民主主義の息吹を伝えてくれる優しい先生と、直ぐビンタや鉄拳制裁を加える「逆コース」の先生がいた。中学三年の春、アメリカの水爆実験によりビキニ環礁で被爆、死の灰を浴びた第五福竜丸が帰港した。自宅兼工場の我が家から百メートル離れた岸に停泊。新聞記者やガイガカウンターを携えた白衣の人々の姿を毎日見ていた。船員の発病と死、マグロの廃棄処分等で、焼津を中心に日本中が騒然となった。

東京から撮影隊もやってきて、大正町の旅館が本部になった。私は先生に言われて新藤兼人監督に会い、現地調達のエキストラにされる。宇野重吉が演じた「第五福竜丸」には船員の恋人の弟役で出演した。生徒会長だった私は止むにやまれず、別の中学の生徒会長

と連携して、原水爆禁止の呼び掛け文を書き始めた。後に知ることだが、この運動は旧吉永村「現焼津市」の青年団と東京杉並区の主婦達へと全国的に広がったという。今の「核廃絶」の始動であったことをＮＨＫの「この日、この時」のナレーションで知らされた。しかも、あの時の「呼び掛け文」と「署名簿」そして私と小川中学校生徒会長の名前が鮮明に映っていて驚いた。福竜丸展示館で二〇〇九年に見つかったことも、静岡新聞で知った。

私の少年時代、一九五〇年代は朝鮮戦争、再軍備、学校教師の勤務評定などなど。きな臭い時代に逆行する世情で子どもながらも嫌悪感を持っていた。高校・大学の頃はベトナム戦争、日米安保条約、米軍のキューバ侵攻など、黙ってはおられない雰囲気の中で学生らしく経済、社会の仕組みやものの見方、考え方の基礎となる本を友人達と学ぶような時代であった。戦争及び軍国主義・ファシズムへと導く地ならしへの嫌悪と、人間の尊厳と民主主義をもたらした日本国憲法の精神を、これから生きていく道標にしようと考えた。

それから五十年の時が経とうとしている。社会へ出てその大部分を繰り返された経済的激変の中で、ものづくり中小企業の経営の成長と安定のために無我夢中で働いてきた。息子や娘を思いやる余裕さえなかったように思う。今は、事業継承も満足に行き見守ることだ、これからは、孫達とその子ども達の時代が幸せと安穏であるように、自分の出来ることで尽くしたいと思う。

戦争は体験していないけれど

加藤　洪太郎

■戦争を体験していない

今年も八月十五日に日々が進んでいく。ふと思うことがある。自分は戦争を直接体験していない世代なのだと。一九四四年生まれなので敗戦の時は一歳そこそこであった。

■それでも

それでも、次のような思いはある。

１　戦火にさらされたくはない。

２　戦争を避けるための努力が今なお必要。

３　そのなかで相応の役割を自らも果たす。

■そうは思わない人

戦争を一人で阻止することなどできるわけもない。大勢が協力

しあって始めて阻止できる。だから、人様にわかって貰おうとあれこれ話す。だが、よくわかって貰うことが出来ない。特に「相応の役割を自らも果たす」と言うところまではなかなか難しい。その人が実際に「相応の役割」を実行されるかどうかで、おわかりいただいたかどうかは端的に知ることができるのだが。どうしたらわかってもらえるか。あれこれ考えるのだけれど。それこそよくわからない。

■

では、なぜ自分はそう思うようになったのか

■

そこで基本に立ち返る。ほかはない、ならば己は、どういう経過でそう思うようになったのだろうか。戦争を体験してもいないりに。

それをあらためてふり返る

1

「空から機銃掃射にさらされた。怖かった。」と言う体験を聞く、確かに怖かっただろうと思う。

少し前中国を旅した。軍が経営するレストランの裏で機関銃を撃たせてくれる。正面の土手に向けて引き金を引く。反動が凄い。何発かに一発は曳光弾なので、それを頼りに撃つ。着弾したところで激しく土煙が上がる。ふと考えた。あの場所に、今、自分がいたら。立ち向かい反撃出来るか。とても尋常ではできることではない。と覚える。

2

沖縄を旅した。散らばる骨片が眠るガマ「洞窟」に入った。砲火に追われて逃げ込み、追い詰められて遂に「他に道なし」と集団自決。ほんとうは生きていたかったのに。このガマで命を失われた方々の慟哭が胸に迫って言葉出ず絶句。

ここでも考えた

生きると死ぬのを自分の意志で決めることが出来ないところまで追い詰められた。その時間を巻き戻し、何処に歴史のターニングポイントがあったのかを振り返る。その時点で死力をふるうことができたならば、歴史の転回を阻止することができたかもしれない。と。で、今日、時間軸の中での自分たちの立ち位置は・・・。

3

今、既にターニングポイントに立っているのでは・・・。大連から旅順、二〇三高地をはじめ旅順攻囲戦の戦跡を旅した。ここでは日本側だけでも実に六万名に及ぶ死傷者を出している。弾痕すさまじい要塞跡で、同行の若者に問う。「日本から遙か遠い大連北方に上陸し、歩き歩いて旅順に迫る。その行程を何万という若者を進ませ、しかも最後に弾雨の中を突撃させた。いったいどうやって。」

その若者、暫く考えて曰く
「その当時なら自分もついて来ただろう。自分は貧しい農家の三男坊なので家にはいられない。食えるところが軍隊なので、〃そこが全て〃となると思う。」と。
現在のアメリカを旅した。
経済困難の深刻さが随処に及んでいる。ために合衆国軍隊の縮小が必至の課題に。だからその分、同盟国・日本の軍事力の世界的展開を求める。その圧力が強いのだ、と実感。因にイラク戦に米同盟軍として本格参戦したイギリス軍の戦死者は一七六人。本家アメリカ軍の死者は四、六四六名。米軍兵士は徴兵でなく志願兵。貧困が故の志願が多いという。

■いつの間にか貧困の日本

さて、肝心の日本。いつのまにか格差社会となり深刻な貧困が。ターニングポイントは、今なのか。人それぞれの〃間接体験〃を共有しあい、互いの〃考える〃を出しあって交流の地道を重ねよう。

私の「8・15」前後

湯浅　俊彦

長い間の疑問だった。昭和20年（1945）の記憶がほとんどないのである。ところが、最近、ようやくその頃の悲しい出来事が分かった。父が書き残してくれたたくさんの「手紙」の中にそれは記されていた。

父は京都市役所に勤め、その頃「防衛局」で働いていた。週何回か当直があり、「警戒警報」のサイレンが鳴り響くと、母は「あれはお父さんが鳴らしているのよ」と三人の子どもを抱き寄せるようにして話したのを思い出す。統制の食料配給もほとんどなく、食べ物を求めて母は大変な苦労をしていた。「三人の子どもを連れて、目の玉が映るような薄いお粥が食べられると言っては、大勢の人の後ろに並んで、自分は食べず子どもにだけ食べさせていた」と父はその頃の思い出を書き残している。

ヤミ米を手に入れることもままならず、父は戦地にいた兄の勧めもあって、丹波の生家（現南舟市日吉町）に疎開することにした。5月初旬、トラック2台で家財を運び、母子は山陰線で我が家をは

なれた。山裾の大きな屋敷の離れでの暮らしが始まった。男子は戦争にとられ、母も、そてしまだ8歳だった私も農作業を手伝ったことを覚えている。慣れぬ農作業のためか6月になって母が発熱、八木町にある南丹病院に入院した。肺結核で「絶対安静」と診断された。父に連れられ私も見舞いに行ったが、木造平屋建ての病舎、庭では付き添いの家族が、コンロで病人や自分の食べる炊事をしていた。もう病院給食は出来ない食料難だった。

困った父は、勤めを休む訳にはいかず、ついに7月15日に退職してしまう。ひと月前に妻の入院看護に付き添うために出した辞職願がやっと承認されたのだ。明日から病妻の看護に専念できると計画した翌日、赤紙（召集令状）が届いた。ひ弱な獲物を狙う禿鷹のような召集令状は、根こそぎ男狩りでもあったのだ。退職は何の意味もなくなった。結局、病院で絶対安静の母に付き添い看護する者はなくなり、母は、看護してくれる実家で療養することになった。「寝たきりの病妻と三人の幼子を実家に預けての出征は、この先の不安ばかりが先走りして、勇んでの出征とはとても言えるものではありませんでした。」と、父はその時の心境を綴っている。

昭和12年（1937）生まれの私は、敗戦の前年に京都市北区の小学校に入学した。2年生の5月に転校、更に7月に修学院国民学校に転校した。土地毎に訛り言葉があって、言葉遣いの違いでいじめられもした。警戒警報発令で集団下校の時、B29が目の前で次々焼夷弾を落とし、麦畑が炎上した恐怖の瞬間も覚えている。修学院国民学校は軍需工場になり、高野川沿いの旅館が学校になり通学した。敗戦の玉音放送は祖父達と一緒に聞いた。誰も何も言わなかったが、蝉時雨のなかで、みんな安堵と不安の気持ちが錯綜していたように思う。

父が9月下旬、三重県の部隊から復員し、暫くして、療養中の母は実家で引続きお世話になり、家に戻った。小学2年生と就学前の弟2人を抱えての生活は大変だったろう。父が友人と一緒に設立した材木会社は倒産し、先祖から相続していた美林は盗伐され、犯人は逮捕されたが、実刑判決で服役しただけでお金は一円も戻ってこなかった。失業と病妻の看護と、子育て。毎日苦労の連続だった。それでも父を支えていたのは「病床の妻にすくすく育つ子ども達の姿を見せる」ことだったと、書き残してある。

しかし、昭和23年12月、母は突然喀血し、父が駆けつけた時

はまだ意識があったが、私たち子どもは間に合わなかった。私はその夜、父とともに一晩中泣いた。弟二人はまだ「死」が理解できず、きょとんとしていた。それがまた周囲の涙を誘った。「もし丹波に疎開しなかったら、京都にいたら不幸はなかった。市役所もやめていなかったし。妻の病気は府立病院に入院させることができ、看護、介抱も思うようにできた」といつも自責の念で私を話し相手に選び話していた。『戦争さえなければ』『戦争が幸を奪った』と繰り返していた。確かに戦争が始まるまでは我が家は幸いっぱいだった。

私は「なぜ戦争は起こるのか」を知りたいと思うようになった。そして、高校入学と同時に社会研究会に入り、戦争の原因を学んだ。そして、反戦。平和の戦列に加わった。私の人生の原点である。

事業に失敗した父は１９５０年、市役所に再就職した。４０歳で採用試験を受けて。

シベリア捕虜の頃

橋詰　四郎

橋詰、眠ると凍死の営倉に入れられ「日本に帰りたくない人」とゼッケンを付けて働かされる。

バイカル湖より西方中央シベリア、氷点下４５度のクラスノヤルスク。蒸気機関車修理工場で５００人以上の捕虜がロシア人労働者と同じノルマで対等に強制労働を強いられていた。私は蒸気機関車ボイラー用各種鋲を旋盤加工作業。準夜勤（午後５時～午前１時）昼間監督が「これをやれ」と山積みにした「鋲」を規定寸法通り削っていると、エアーハンマー組が別の「鋲」を削れと言う。ハンマー組は親方ロシア人と捕虜の２人１組。親方は相棒の捕虜を可愛がるが、奴は辛く当る性悪でロシア人からも嫌われている札付きだ。

私は監督の命じた仕事でノルマ一杯これ以上無理と断る。相棒の捕虜「引地」がホッとした顔になる。私が「鋲」を削らないと奴はノルマゼロ。ロシア人がノルマゼロは大変な事になるから、奴の声が次第に大きく荒々しくなり、同じハンマー組が４人８人と集まり出した。ノルマゼロは人事でなく成りゆきを注目。奴は集まったロシア人にも頼んでくれと嘆願。仲間は両肩を少し持ち上げ、両手を相手に向け少し広げ「俺は知らない」の意思表示。顔は私に向け「頑張れ？」のウインク。奴は「引地」にも頼めと迫り、引地は両手

で私の両肩を揺さぶり大声で「橋詰頼む休ませてくれ」私も「まかせろ」と大声と同時に引地を突き放つ。日本人同士の願いも断ったと思った野次馬ロシア人から「ウオー」と歓声が上がる。

奴は「俺が監督だ、俺の言う通りに仕事をせよ」すかさず私は「ブリョウシュ・ウチベアガマンジェルネート・ヤー・アジンナカバ・ラボーチ・イジナーホイ」「嘘つき野郎、お前も俺と同じ労働者だ・五月蠅い何処かへ行ってしまえ」野次馬は「ダーダー・そうだそうだ」と１００％私に味方。娯楽のない国なので野次馬は楽しんでいるようだ。応援の拍手に奴は激怒し「ヨッポイマーチ」と叫びハンマーを振り上げ殴りかかる。私は鉄の丸棒を護身用に殺人短剣術で習得した技で見事受け止め、返し術で奴の額から血が出る。血を見て『銃殺刑』だと頭を横切る。武術の流れ私の突きに奴は逃げる。野次馬は「よくぞやったと」私の肩を叩き賞賛する者もいる。逃げたのでなく監視兵を連れてきて逮捕される。私は「ヨッポイマーチ」だけを強調し、野次馬ロシア人も私の証言を支持し争いの流れも解説してくれる。

※ヨッポイマーチ最悪の侮辱語で使用禁止語。喧嘩で利のある方が使うと逆転負けにされる言葉。日本に無い侮蔑語なので訳さない。

捕虜は勿論、福永中隊長も私も誰もが銃殺刑を覚悟していたら営倉一夜刑だ。兵隊を揃え鉄砲を撃たせ殺さなくても、一晩入れておけば朝には冷凍死体間違いないのだ。同室の戦友が揃って夕食を届けてくれ、皆が一箸づつ出し合ったと食べれないほどの量を目の前に今生の別れ。惜しまれて死んでいく名誉を感じた。

シベリアへ拉致され直ぐ大勢が死に出した。酷寒・飢餓・重労働・栄養失調に加え着のみ着のまま着替えもない、発疹チフスで血便垂れ流し糞まみれで死んでいくのだ。俺は奇麗に死にたいと思っていたらキツネ（ソ連の女医）が点呼で、病人を助ける薬は血液しかない、輸血したら助かる捕虜がいる。病人の血液を調べる薬もないから０型の血液をくれ３日休ますと云う。栄養失調者が献血し体力低下させ、３日休んで４日目に死ねたら奇麗な体で死ねると志願する。同室の戦友全員「よく考えよ薬がないのだぞ、お前も輸血された者もやがて死ぬ、無駄だから止めろ」「奇麗に死ねるチャンスだ。日本へ帰れた人は俺の死に様をお袋に話してくれ」と医務室へ。

医務室でキツネ（女医）が机に顔を伏せ肩を波打たせ泣いている。どうしたと聞くと「今、日本人が死んだ」と。捕虜の死に泣いて

くれる人がいたのだ。しかもそれがロシア人に驚く私。馬鹿野郎楽がしたくて俺より早く死にやがって、糞まみれでもいい、早く死んでいつ迄続くか判らぬ地獄から逃れたいのだ。ソ連によって非人間社会にされているのだ。死ぬと一糸まとわぬ全裸にされ、小屋に積み上げトラック１台分になると何処かへ運ばれるのだ。捕虜全員が明日は我身の極限に生かされている地獄図の世界で、人の死に泣く人間性の資格も、ソ連に剥奪喪失されているのだ。

献血を申し出るとキツネの顔が輝き、見たこともない大きな注射器を担いできた。８当分の目盛り数字を見て真ん中の２００を指すと「ニェット・違う」と一番上の４００を指す。日本の献血は２００ＣＣだったがソ連はヨーロッパ圏で４００ＣＣだと判断し「これで死ぬ確立も倍になった」と思う。部屋に戻り横になっているとキツネが「クッズーミ・橋詰」を連呼し米・肉・砂糖・油各３００グラム置いていく。一回でいい舐めてから、食べてから死にたい食料なのだ。戦友はあわてず毎日少しづつ食べよとアトバイス。私は今少しも残さず全部食べ終え、眠りながら死ぬ、と宣言。戦友は今夜か遅くとも４日目には死ぬと思っているからと、私の希望通り全部を一度に飯盒に入れペチカで炊いてくれる。

出来たと持ってきたので蓋を取ると、熱気の湯気と強烈な油の異臭が鼻を衝き戦友共々顔をそむける。油が厚く濃く漂っているのを見た途端。ヒマシ油が頭をかすめ同時に空腹の腹がパーンと張り食欲を無くす。戦友７人がうまいうまいと食べているのを横目で睨みふてくされて寝てしまう。工場で捕虜の働く職場を巡回する福永中隊長が、私の職場で「クッズーミは献血て死にかけている」と話し、職場のロシア人からだとロシア式栄養食を持たされてきた。献血休暇？の３日間差し入れられ生還。食べ物をねだる戦友もこのロシア人からの栄養補給食を狙う奴はさすがに現れなかった。

今日も昨日と同じ血便垂れ流し死が毎日続いている。自殺失敗者は再度自殺を考えないと聞くが、奇麗死願望は消えないままだ。今度は思いがけない流れで奇麗死実現と思っていたが、営倉で食べ切れない粟粥を見下ろしていると無性に腹が立ってきた「敗者」が「勝者」のあろうことか「額」を攻撃したのだ。「見せしめ刑」で銃殺だと思ったら、泥棒の凍死刑と同じ扱いだと気付き、怒り心頭。怒れてきた。寒気が冷気が睡魔が横になれと誘う。横になり眠ると「死」。朦朧と立ったまま「泥棒ではないぞと」足踏み体を動かす。外塀を激しく叩き『珍念眠るな』と福永中隊長が大声で叫んでく

れている。弱々しい足踏みを強くして応答。力尽きる頃また叫んでくれ、持ち直すの繰り返しが続き見事生還。

生還したら捕虜からもロシア人からも英雄にされたり無法者にされたり、狡猾なソ連は私の胸と背中にロシア語で『日本へ帰りたく人』のゼッケンを一週間張り付け働かせ、ロシア人の笑い者に供した。暫くして中隊長が「珍念、ロシア人の間で、お前とは争うな相手を消す疫病神だと噂されているぞ」と。引地の親方は消され、新しい親方に、新しい親方は引地をハラショラボーター（優秀労働者）に推薦。引地は食事の量も多い仲間になった。私が歩くとロシア人は横へ身を寄せ道を譲る気がしてきた。中隊長にはこれで2回助けられた。感謝。

※ソ連はノルマ王国、言葉を知らぬと生死に直結する自分のノルマをロシア人に取られるので、露助に取られてたまるかと必死で言葉を覚えた。汚い労働者の言葉を、アア恥ずかしい。

※珍念＝福永中隊長だけが私を呼ぶ言葉

捕虜1年半経過の頃、ハラショラボーター（優秀労働者）とアクチブ（天皇崇拝からスターリン崇拝に転向者）から日本の家族へ葉書一枚が貰え「他の戦友名・地名・作業名」は書けない。アクチブは「スターリン大元帥陛下のご配慮でなに不自由なく快適に過しています」と手本を示した。欲しい物は書け届いたら渡すと。初の人が日本からの小包を待つ頃、私も葉書が貰え「キヨウアメ・アスハレ」とだけ葉書一面に書いた。アクチブは天気予報かと笑い、福永隊長は見事な現状表現、禅坊主のようだ。と絶賛し「珍念」と呼び、私も満足していた。

※福永中隊長に二度助けられる。二度目は本文の「営倉一夜刑」。初は、敗戦を知らず8月21日まで強力なソ連戦車軍団と死闘。ソ連軍から日本の負けを知らされ、捕虜になれば家族が地域社会から差別されると単独逃走中、千人以上の日本兵がソ連兵に連行されているのを隠れていた山から見て「あれだけ大勢なら殺されはしないだろうと」夜を待ち野宿中の部隊へ潜入成功。本部で今日までの行動を申告。この部隊ソ連軍と交戦なしで15日。自主武装解除後ソ連兵の監視下に全員時計、万年筆略奪され大困り。戦争もしていないのに負けは弱虫国境守備隊だと怒っている。大隊長が「誰かこの薄汚れた敗残兵を拾え」と。福永中隊長が「私が」と。今年も「珍念」の名で年賀届く。94歳・福岡市で健在。

罪状示さず判決　懲役二十五年

シベリア鉄格子の中で

小池　義人

昭和十八年（１９４３）十一月、私は満州（現中国東北）の関東軍独立守備隊へ入隊した。大学を繰り上げ卒業した直後のことだった。厳密な意味で所謂「学徒出陣」ではなかったが、校門から軍隊へ直結していたからやはり広義の「学徒兵」であった。軍隊経験はゼロだが高学歴なので、将校勤務見習士官の資格で、東満州の佳木斯（チャムス）で専ら初年兵、なかには私より高年齢者の訓練教育に当たっていた。

昭和二十年八月九日ソ連軍の攻撃は、私達関東軍苦難の開幕であり、十五日敗戦、それに続くシベリア抑留と、歴史の舞台は最高潮に達していく。ソ連軍は降伏した将兵を武装解除し、日本人捕虜を大隊単位で次々ソ連領へ送り込んだ。私達の大隊がハバロフスクの収容所に入れられたのが、十月初旬であった。収容所（ラーゲル）は「ハバロフスク第十六日本人捕虜収容所第五分所」。このラーゲルで工作機械経験者捕虜は工場へ、技術のない者は肉体労働の建築、土木、荷役、清掃等へ回され、いつ帰国出来るかも判らぬまま、捕虜の辛さ悲しさを身に沁みて覚えさせられ二年の歳月が流れた。この間、ソ連は、捕虜に望郷の念をつのらせ、狡猾に赤色思想を浸透させ、赤色分子のリードで「吊るし上げ」が横行し、「資本主義打倒、帝国主義反対日本島敵前上陸」を叫び、帰国近しの幻想を演出していた。

《ラーゲル炎上》

昭和二十二年十二月二十七日深夜、ラーゲル内の乾燥室から出火。極寒地なので、少しでも湿り気がある衣服、靴は即凍傷につながるので、強制労働で濡れた衣服、靴（フエルト製の長靴）を翌朝までに急速乾燥さす必要上過熱による失火と思われるが、たちまち全棟を焼き尽くし。防火対策は大隊副官の私の指導で行なっていたが、不利な深夜、消火作業と熟睡の捕虜の避難誘導に当たったが、出火による停電の暗闇に加え煙の充満に、手の施しようもなかった。夜が明け、火災の炎は赤々と燃えつづけているいる中、私は部下の安全生命掌握に、捕虜のラーゲル内と云う悪条件下で、最善の努力をした。避難した部下達が集り出した頃、私はソ連兵に逮捕され、このラーゲルに戻ることはなかった。

《下　獄》

火災現場で逮捕された私は、ラーゲル本部へ連行され、翌日まで二日間にわたり数人の検察官に入れ替り立ち代り訊問され、多数の犠牲者が出たことも知らされた。訊問の内容はどの検察官も大同小異、出火の原因、出火後の状況と対応、思い当たる出火の原因、更に、平素の管理防火体制などなど。同じことを繰返し訊問され、見たまま、対応したこと、感じたことを言うだけだったが、私以外の日本人に責任が及ばないように心して受け答えをしていた。訊問の結果も知らされず終わったようだ。帰れると思ったら考えが甘く、ハバロフスク拘置所へ送られ、暗い部屋に押し込められた。ガチャッと錠を掛ける音が真冬の冷気に響き、これからの運命を悪へ予告する予感がした。部屋は四、五十人ほどの大部屋、異様な風景と匂い。胡散臭い風体の者ばかりで、真夜中と云うのに皆が私を取り巻き睨む。「ウォッ・ヤポン＝日本人だぞ」の声に睨みから好奇の顔に、「もう一人日本人が居る」と、大隊長だ、この房は「カランチーン＝未決囚の溜り場」らしい。

《独　房》

翌日、三階の独房へ、施錠した看守の足音が去った。部屋は真正面に鉄格子の狭い小窓。天井は円形の蒲鉾型、天井と壁、壁と床、直角部分も円く角がなく、壁、天井は濃厚なピンクのペンキで塗られ床だけが黒い「桃色部屋」だ。取り調べは十日間ほど、一週間以上呼出しもなく、昭和二十三年一月十七日私は裁判を受けることになった、裁判所の建物は見覚えのある極東軍司令部。玄関に「極東軍ハバロフスク軍事裁判所」の金看板もかかっている。私と大隊長は二階へ連れられ、階段横の狭い物置部屋に押し込まれ「ここで待っておれ」と施錠される。本当に狭く膝を突き合すように腰をおろし、小声で互いの情報交換をし、「私達は無力で俎板の上の鯉たが、裁判では、言うべきことは堂々と主張しょう」と励まし合い、我々以外の犠牲者は出さないようにと確認した。

《裁　判》

私一人法廷に入った。法廷は会議室を利用、正面壁にソ連国旗が僅かに法廷らしい威厳を示し、反対側の壁の下が被告席。MBD＝内務省軍隊の少佐が裁判長。二人の兵士とロシア人通訳を従え入廷。別の入口から民間人書記が着席、看守が七、八人の証人を両側の席につかせる、全員私の部下だ。火事当日ラーゲルにいなかったNも証人なので不吉な予感。Nは憲兵軍曹。捕虜になるや逸早く憲兵を隠し、赤色グループの先頭に立ち、捕虜の赤色化運動を積極的に

行い、大勢を巧みに先導して「吊し上げ」を行い、自己保身のためなら親でも餌食にするスターリンと同一タイプの人間なのだ。私はこの裁判は火災だけでなく思想的な背景導入もと危惧した。弁護士も与えられず、弁護士なしの裁判が始まった。裁判長はにこやかな顔と優しい声で「君は裁判官を忌避する権利を持っている、その権利を使うか？、君は自分に必要な証人を当法廷に呼ぶ希望があるか？。」と、開口一番物静かに話しかけるように言った。なんとしらじらしい余りにも形式質問に愕然とする。私は逮捕されるような犯罪は犯していないし、裁かれる罪状も知らされていないのだ。火災現場で一方的に逮捕され、質問に三分以上の返事を通訳は〇，〇三秒のロシア語（ニズナーユ＝知らない）（ダーダー＝その通り）と訳し、その連続で一時間前、何の理由も説明もなく監視兵に連行され法廷に、私を起訴する検事も、私の権利を守ってくれる弁護士もつかない法廷で、片言の日本語しか話せない通訳での裁判なのだ。裁判長の問いに対し「私は清廉潔白で犯罪者ではない、この裁判は罪のない私に、私の罪状を説明せず私を裁こうとしている。折角だから計画通り進めてくれ、お手並拝見」と半ば比喩も含め自虐的に返答したが、この発言も通訳は〇，〇三秒の短縮に仕上げ裁判長に通訳した。

裁判は私を立ち会わせ質問は証人達に向けられ、火災時私の指揮命令などを証人に求め、どの証人も「副官は私達を安全な場所へ避難させ、自分は火災現場へ戻っていた」と、異口同音な証言であった。Nが立ち上がり発言を求めた。裁判長は「君は火災当時ラーゲルに居なかったから、私の質問の対象外だ。私が必要としない証人が何故居るのだ、他の発言も禁止する」と言い放ち私を驚かせた。（私が帰国して知らされのは、火事責任で私が逮捕されるや、減刑嘆願署名運動が直ぐ始まったのに対し、N等赤色グループが嘆願署名反対運動を展開し、大隊長や副官如きは地主、資本家の番犬で、我々を搾取してきた労働者農民の敵だ、極刑に処し日本へ帰すなと演説し、署名運動者を吊るし上げ、署名運動を挫折させたと云うのだ）

今にして思うのは、Nは赤色幹部の地位で証人を志願。私への有利な証言阻止が目的だったと思う。証人に睨みを利かそうとしたが、私への有利な証言なので、N独特の反論で、副官は親愛なるソ同盟の財産を巧みに消失させ、尚、十数名の労働者を焼死させ祖国ソ同盟の生産能力を低下妨害工作した重大な犯罪者であると、減刑署名運動を阻止した演説の再現を法廷で行い、自己保身に磨きを掛けようとしたとしか思えない。

《判　決》

私の発言は「そちらの筋書き通りにどうぞ」の一回だけで、二十分間の証人証言で裁判は終わった。五分休憩し二十五分に判決だと通訳される。五分後開廷し驚く、二十分に渉るやりとりが、たった五分の間に奇麗にタイプ印刷で冊子に製本されているのだ。到底五分間で為しうる技ではない。と、すると、既に事前用意されていて、Nの割込発言は入る余地もなく、当裁判に迷惑千万の何ものでもないのだ。検事、弁護士不在裁判は、裁判長が判決冊子全文を朗読したにも拘らず、通訳は見事に短縮し日本語六文字「懲役二十五年」私は遂に自分の罪状も教えられず、三十分間に一人生産する、タダ働き二十五年者製造ベルトコンベヤー裁判制度の犠牲者にされていた。

《囚人中継刑務所を盥回しさせらる》

昭和二十三年二月十一日、ハバロフスク拘置所からロシア人囚人五十人の中に入れられ駅まで徒歩と決まり私は驚く。囚人の中には凶悪犯もいるだろう、好奇心から近づいてくる不用意な婦女子を人質に出来るだろうと。囚人五十人は片手づつに乾パンと身欠鰊一匹を持たされ、五列縦隊隣りと固く強く腕組みを強要され、前後左右は自動小銃、剣付小銃の兵十数名が取り囲み、数頭の警察犬も動員され、「とっとと歩け・馬鹿野郎・キョロキョロするな」怒号と罵声に犬の吠声も加わり、パンと鰊を落とすまいと強く握り締め騒然な騒ぎをまき散らし駅へ、警察犬の威嚇吠えに歩行者は逃げ誰も近寄らない。なんとも賑やかな犯罪者護送隊列で通行人に好奇な印象で、実に惨めな屈辱的な仕打ちに腹が立っていた。

囚人輸送貨車は家畜貨車を改造。拷問にも似た貨車内の苦しみに耐えながら五日後イルクーツクに到着した。私はたった一人の日本人なので囚人達からの差別も覚悟していたが、国境地続きのユーラシア民族なのか人種差別も、敵国人扱い差別も意識しないばかりか、ロシア人囚人から尊敬？一目置かれているようだった。私が知らない私の罪状はロシア人囚人間では「国家反逆罪」らしく、新生国家建設のヒーローと評価されているらしく、私自身は益々不安になる一方だ。

《牢　名　主》

「水戸黄門」「大岡越前」にも牢名主が、ロシアで囚人にされ「ロシア牢名主」の一端を垣間見た。簡略談義すると犯罪を「硬派」「軟派」に区分し硬派犯罪は軟派犯罪者を軽蔑。年齢、体力、地位

に関係なく、軟派犯罪者は硬派に頭が上がらない。硬派犯罪を上中下に細分し「上」は国家体制批判らしく私は「上組」らしい。上ランク者は度胸と決断に秀れ捨身で国民に尽くすヒーローなのだ。刑務所が変わる度に「何をして入ってきた」と聞くので「判らないが懲役二十五年にされた」これだけで一級思想犯の地位を牢内で与えられるらしい。煙草を口にすると刺青の大男が火をつけてくれたこともあった。

イルクーツクの引込線にはプラットホームはなく、貨車から飛び降りるのだが、五日間狭い車中で動けなかったので、膝が劣化していて飛び降りると同時に転倒者が続出。脱走は到底出来ない、輸送中に貨車内で膝を退化させるのである。囚人用バスに乗せられ三十分ほどで「囚人中継刑務所」に着き、一週間滞在。

《病魔と闘う》

再び拷問的な囚人虐待貨車で三昼夜。ノヴォシビルスクに着く、ここも「囚人中継刑務所」で一夜。翌朝、二日分の食糧を持たされ囚人貨車に詰め込まれ二昼夜、ペトロパブロフスクだと聞かされる。私は体調に変化を覚え、寒く発熱病状の悪化を自覚する。一人で歩けず舎房に運ばれたが足の踏み場もない満員。地面の土間に直接寝かされる。湿気と冷気が直接這い上がり破れ衣服にしみ込んでくる。翌朝は立つことも出来ず四十度の高熱。私を尊敬しているロシア人囚人達が入院、医者と嘆願してくれるが、一人になるのが心細かった。病室はお粗末ながら清潔であった。昭和二十年日ソ戦から帰国船に乗船する昭和二十五年四月まで、寝具に包まれ眠ったのはこの時だけであった。

《高熱に負ける》

私は治療を受けたか医者が居たのかも記憶がない。一途に囚人貨車の中で芽生えた不思議な連帯感から、仲間から隔離された不穏に怯えていた。……私は突然ベッドの上に立ち仰向けに倒れ、後頭部をベッドの鉄柵に打ちつけ後頭部を割り死のうとしたらしい。気がつくとベッドに縛られ身動きも出来ない。縛られているのを感じながら眠ったようだ。病室での記憶はないが見た夢の記憶は今も覚えている。広場に縛られ転がされている私を、祇園祭の大きな山車が足元からじわじわ迫ってきて、足、膝、腹、胸、顔と頭を越すと私は死ぬのだ。山車が顔に迫ると足元で父が呼ぶ、頭を持ち上げ父を探すと山車は足元へ戻り、また頭へと迫る、母が呼び、頭を持ち上げる、学生時代の友人達が、と、私を救いに足元に集まっている。

何日間病室にいたか判らない。頭の傷も治療へ、熱も下がったと思ったら元の舎房へ戻されたが、血肉をわけた兄弟より信頼しあったロシア人囚人は入れ替わっていた。

《本命刑務所へ収監は判決五カ月後》

シベリア鉄道ペトロパブロフスクから支線で南へ三、四日でカラパスへ。日本発行地図には掲載されていない場所だが、ロシア人囚人によると、炭田地帯として有名なカラカンダ地方の一部で、流刑地として有名一般人は居住していないと云う。この地に一カ月ぶち込まれいよいよ本命の「強制労働刑務所」行きと決まったとき、私は素直に驚くことなく平常心で受け入れることが出来た不思議を今も覚えている。達観し？たか諦め？たか俎上の鯉に到達し？たか。カラパスから汽車で一時間の「カンスパイ強制労働刑務所」に収監された。この地名も日本発行の地図にはない。三百六十度大草原のど真ん中に位置する刑務所であった。私達のグループは二十人、僅か二十人の人種はドイツ、ロシア、ウクライナ、アルメニヤ、ラトビヤ、マジャール、カザック等々驚くほど実に多彩で囚人間の公用語？共通語はロシア語。灌漑用水路構築の作業へ。

少し判った事は、この刑務所は「農業刑務所」果てしない不毛の大草原を開墾し農地に、一大穀倉地帯を造り出す刑務所なのだ。草原の中へ縦横に網の目のように灌漑水路を拡げる。ソ連の狙いは三十分に一人、検事弁護士不必要罪状告知不要のタダ働きのベルトコンベア裁判で生産される豊富な労働力を投入しているのだ。肉体労働に不馴れと病み上がりに過大なノルマは殺人的にのしかかる。一人ノルマならノルマ未達成懲罰も個人だが、四人一組チームノルマでグループから舌打ちされる辛さ、仲間にかける迷惑は自尊心を深く傷つける。一日の労働時間も長く、夏は体温より高い四十度の炎天で十二時間労働。冬は氷点下三十度以下の酷寒、夏冬屋外屋根なし労働、厳しい寒高気温に耐えるだけでも精一杯であった。

《マローズ》

シベリアの冬の挨拶は「ザミヨロス＝凍りそうだ」的確な表現挨拶に感服もした。マローズは超酷寒を指す。マローズになると空気が凍る。空中の水分が凍結する。木端微塵にされたガラス粉が空中に浮遊しているようだ。この自然現象を見ようと目を向けても、ぼやけてはっきり見えず、眠くないのに瞼が重なっていく，目をこすると少し良くなる。瞼が重なる現象は上下の睫毛に霜が付着し視界を妨げるからだ。この時には眉毛は勿論、鼻毛も不精髭も凍り。不

精髭を擦ると髭が折れるほどに凍っている。広げた布を半分に折ると繊維も凍っていて二つになる。マローズの後は猛吹雪が三日ほど続く、猛烈に吹き荒れ視界ゼロになる。当然労働休み。この休みが地獄に変貌する。刑務所は二十人部屋が連なりトイレは部屋にはない、マローズになると部屋へトイレ用桶を持込み部屋は施錠されトイレは室内ですます、毛布は二人に一枚、ランニングとパンツ姿にされ衣服や靴までとられる。食事は黒パンとスープだけ、マローズ一日目一食抜き、二日目二食抜き、三日目三食抜きパンだけの減食。過去にマローズを狙って脱走、脱走の度毎に厳しくし現スタイルで脱走者皆無になったと。脱走凍死するだけだ、お前達の命を守る「エト・ザコン＝これが規則だ」と。人間の尊厳も剥奪される。

《懲罰刑務所》

昭和二十四年十一月中旬、私はこのカンスパイからプラチーナ刑務所へ移監された。一年から二年で別の刑務所と聞いていたので、一年半になるからと想像していたから規定通りだと思った。「ソビライ・スペチャーミー＝荷物を持って出よ」二時間ほど歩いて着いたプラチーナ刑務所は最高に厳しく厳重な刑務所だと思った。四隅の望楼は同じだが、三重の鉄条網と、番犬用の鉄線も取り囲み更に、敷地内の獄舎獄舎毎も鉄条網で囲まれ、明らかに特別厳重な警備体制刑務所なのだ。囚人は「被懲罰者」であるが、それを更に懲罰する刑務所の存在は異常な緊張感と不安を私に与え、私はワルの中のワルに位置づけられていると思った。作業は四人一組のチームプレーを発揮するノルマ方式で、九分通り出来ているダムの堰堤内部の法面（のりめん）に石垣を張り付ける作業である。大草原の中に万里の長城もかくやとばかりの大堰堤が延々と続いている。何万、何十万とも知れぬ囚人達の血の結晶で建設したと思われる。

忘れもしない昭和二十五年三月七日朝、作業出発準備でガヤガヤザワザワ支度中、看守が大声で「コイケ・ソビライ・スペチャーミー＝小池、荷物を持って出よ」僅か四カ月で別の刑務所かと落胆しきり、と、囚人が「オッ、ダモイ？＝おい釈放だぞ」

（ダモイ＝家に帰る、帰国、作業場から、釈放もダモイだった）

私は「ニェト、ニビリューー＝違う信じられない」するとあちらこちらから、「ダモイ！ダモイ！」と囚人達が自分の喜びのように大声で私を取り巻き、肩まで叩いて祝福してくれる。呼びに来た看守は一言も「ダモイ」とは言っていない。戸惑う私は「スバシーボー＝有り難う」と言えず「ウンウン」と頷くだけだ。懲役二十五年が僅か二年半で……。

《ハバロフスクへ》

私は恐怖の「囚人輸送貨車」に一人乗せられ不安の移動。シベリア鉄道本線に出て列車は東へ向かう。停車駅毎に囚人捕虜が乗り込む、何故か皆一律二十五年刑者ばかり、人数が増える毎に力強くなりダモイ・ナホトカ直行と怪気炎をあげるも二週間後ハバロフスク到着で下車した日本人囚人三百五十人と聞き驚く。私達は刑務所や拘置所でなく、日本人捕虜収容所第二十分所へ、囚人身分から釈放されるらしいと噂する者もいたが、二十分所の役目を聞かされ愕然とする。この分所は憲兵、特務機関の戦争犯罪者ばかりで今尚取り調べ中だと。ソ連は私達既決囚人と戦犯者を合流させ、日本人専用刑務所でタダ働きをさせるのだと疑心暗鬼が頭を持ち上げる。

三日後、私達三百五十人だけ集められハバロフスクを後にナホトカへ向かう。囚人用でなく家畜用だ。家畜扱いにされ大喜びするほど私達はソ連当局に痛め付けられていたのだ。ナホトカでは悪の権化スターリンより悪人化した赤大根（赤色分子捕虜）が私達に一席ブッ「貴様等は祖国ソ同盟に対し犯罪を犯した大悪人共である。貴様等をこのまま人民を搾取する日本へ帰すことは出来ない。我々が貴様等を一人一人分離し、我々の同士に預け徹底教育する。覚悟せよ！」これを聞いていたソ連軍将校が「何を考えている、囚人達はソ連国家への犯罪者だ。犯罪者を勝手に分散されてたまるか、集団で犯罪者として日本へ引き渡す。手も口も出すな」と、赤大根から隔離され、馬鹿々々しい赤大根の餌食から逃れる事が出来た。

乗船前日までの一カ月半、赤大根から離されソ連指揮下で、港湾荷役作業や土木工事の強制労働に従事。それなりに楽しんだ。乗船するまで労役作業も含め百％捕虜の管理は赤大根に委託委任されているのだ。スターリンに忠誠を誓った赤大根達は労働にも、祖国ソ連の為に働け手を抜くなと叱咤。夜は頭脳改造だと共産教育、隊列を組み革命歌を大声で歌わせ、市内を駆け回されてヘトヘトにされている。四月二十四日、赤大根から出陣式を行うから広場に集合と命令。反動勢力の牙城日本へ、祖国ソ同盟国家から「敵前上陸」するから「出陣」だと。赤大根の指示で私たち三百五十名は中央に、両側に私達を挟むように捕虜五百人づつ、千三百五十人が並ぶ。

《日本国へ敵前上陸儀式》

正面壇上には赤旗が林立し「スターリン大元帥万歳！」「ソ同盟よ有り難う！」の横幕。アクチブの赤大根が次々と壇上から挨拶「いよいよ敵前上陸の時が来た」「この佳き日はスターリン大元帥の

お陰だ」「祖国、ソ同盟との別れは辛い」い等々。歯の浮く激励挨拶が延々と続き。壇上では最後の万歳三唱の説明になり、両側の捕虜が初め「スターリン万歳」次に私達三百五十人が「祖国ソ同盟万歳」と。ここで万歳典礼を披露しょう。リーダーの音頭に続き大衆、これを三回繰り返し計六回と聞き分けるように唱和するのが正式万歳。両サイドが終り私達だ。リーダーの赤大根が声高らかに「祖国ソ同盟万歳」私達「沈黙」リーダー更に大声で「万歳」私達「沈黙」他の赤大根私達に向かい指をさし「唱和」強要の姿勢。リーダー猛り狂ったように「万歳」私達無言で壇上のリーダーを睨らんたままの姿勢。赤大根達が私達の方へ駆け寄るのと同時に、両側の千人の捕虜達が一斉にウオーと大歓声を上げ私達へ大拍手。この時点で日本人だけが一体化した瞬間だと思った。ソ連軍将校動かず冷静なので、赤大根も引き下がり出陣式終わる。出陣式の進行は聞かされていないのに、誰一人唱和せず全員一致した感動を両側の捕虜にも分け与えたのだ。

《乗　船》

赤大根に続き千人の捕虜、私三百五十人の犯罪？者はソ連の犯罪台帳の顔写真と見比べられ、囚人扱いのまま乗船手続き。看守が私の名を呼んだ、私はもうすっかり馴れきった要領で、しかも、二度と再びこのロシア語は使うことはあるまいという思いで、ゆっくりと、実に落ち着いて「ダー、ヨシト、スタチヤストーデビノストレー、チー、スローク、ドゥワシッチピヤーチ＝はい、名前は義人、刑法百九十三条軍事法廷、刑期二十五年」看守が大きくうなづき、間違いなく私だと認め減刑も釈放もされずロシア囚人のまま、信濃丸のタラップを一歩、一歩踏み締めるようにして登っていった。

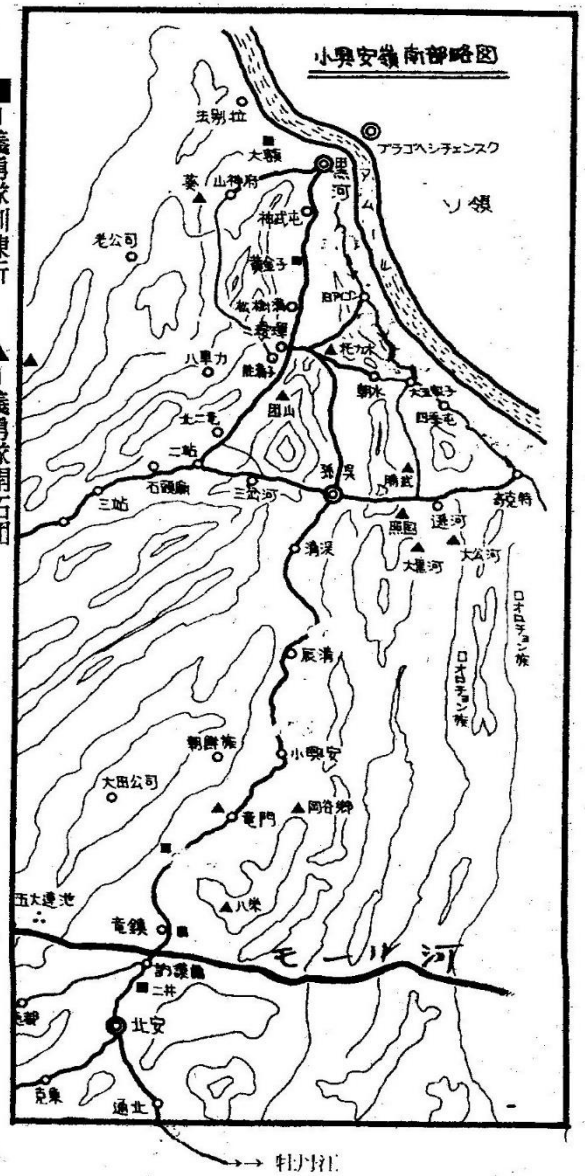
《舞　鶴》

昭和二十五年四月二十五日午後、信濃丸は舞鶴港岸壁に接岸した。と、同時にソ連タス通信は「日本人捕虜全員引揚げ完了」と世界へ向け発信した。私達の信濃丸は最後の引揚げ船だったのだ。

※本体験記録集編集担当橋詰記

「捕虜全員引揚げ完了」タス通信報道に、既にシベリアから生還ダモイしていた私達は驚き、徒党を組みソ連大使館へ「俺達をもう一度シベリアへ連れて行け、何処其処に強制労働中の日本人捕虜がいる、教えてやる」と怒鳴り込む。ソ連は引揚げを再開し、昭和三十三年（１９５８）九月七日白山丸が最終船とされるも、蜂谷弥三郎（島根県）が帰れたのは平成九年（１９９７）であった。またアクチブ（赤大根）に時効は無いと探し仇討ちの旅を……も多数。

〃棄民〃のあしあと　中国編



戦争が終わり世界が日本が平和になってから。死のシベリア抑留。本編は黒河～北安350キロ病人が日本へ向け死の徒歩南下行記。

夏梅　誠一

ソ連邦憲法は『働カザル者食ウベカザル』だと笑っていた私が、自分自身でそれを立証することになるとは。敗戦→捕虜→シベリア連行、飢餓食プラス重労働&不衛生、疫病、虱の媒介する発疹チフスに感染。医者の診察も投薬もなく、働けない病人はいらないと日本へ帰そうとせず、結氷した黒竜江上に新設した鉄道で家畜輸送貨車に乗せられ、中国黒河へ放り出されたのである。

貨車は大連、釜山へと繋がっている線路上にいるのだ。大連まで釜山まで止まるなと祈り続けたが、黒河駅の引込線の一つに止められた。強制重労働で着た切り雀の衣服は、シンシンと迫る冷気を肌へ直接伝え私達は身を屈め、体を寄せ合って貨車の中で懸命に寒さに耐えていた。砂利を踏む足音が止まりガチャンとカギを外す音と共に重い扉が外から開かれ、黒木綿に綿の入った服に「東北人民政府」と印刷した布片を胸に付けた若い男が「降りろ」と手振りで指図した。体力をすっかりソ連に奪い取られた病人の私達には、地面と貨車の高低差一メートルを飛び降りる力はなくモタモタしているのを見た若者は、イライラした顔付きで「快！快！＝早く！早く！」と大声で促すも降りるのに一苦労であった「快快的＝カイカイデー」数ヶ月前迄は日本人が中国人に連発していた言葉であったと思った。何事にせよ日本人の命令や指図に中国人は落着いてゆっくり

した動きなのに日本人はイライラして、罵声と体罰で早く早くと叫んでいたのだった。今や立場が逆転したのを痛感した。

貨車から降りた私達は駅付近の飲み屋街を思わせる飲食店が軒を並べている通りに入った。輪にした腸詰めを紐で繋いでぶら下げている店や、油焼きした肝臓などがガラスケースの中でテカテカに光って並べられたり、ブラゴエでは商店は勿論、飲食店も皆無なのに河を渡っただけの黒河は夢に見た食べ物ばかりで、ふらっと入りたくなるような雰囲気を醸し出しているのを通り抜け、花崗岩の太い門柱にブロンズの装飾がある扉を通って広場で止められた。年配の男が空箱の上に乗り通訳なしで一方的に話し出した。体力もなく疲れきっている私達はボンヤリと彼の話し振りを眺めていたが、彼は突然喋りを止めツカツカと私達の中へ入り込んで、一人の男をつかまえイキナリ平手打ちを五、六発喰わし引き上げていった。突然のソレを見て私達はこれからの収容所暮らしが思いやられた。

新入りを集め収容所でこれからの注意事項や決まり事は伝えず、見せしめに五、六発ビンタを喰らわして入所式は終わったようだ。私達は目の前の大きな建物の中へ入った。広い板の間に八ツ折にした毛布が整然と並び、その上に寝転んでいる者や座っている者が大勢なので、こんなに先客がいたのかと驚いた。毛布の敷いてない空間を探し私より若いと思われる先客に「ここ空いていますか？」と断わり自分の毛布と荷物を置き名前を伝え宜しくと挨拶を、彼は「Kです。こちらこそ」と歯切れのよい返事をしてくれたのでなにかホッとした気持ちになった。朝ブラゴエで病人組に選別され、働けない者はいらないと中国へ送られ、黒河の街の人達のキビシク蔑視の眼差しに晒され、もう疲労困憊ただ眠りたかったので、Kに眠らしてくれと言って深い眠りに入った。西洋の風から河一つ隔てただけなのに黒河は東洋の風が吹いているように心が安らぐ思いでもあり、何故か涙が出た。涙も出ない厳しい国から少し優しい国かとも思った。

収容所は労働もなく、昼は毛布をキチット八ツ折にしたら後は寝転ぼうと枕にしようと自由で、虱退治に専念しながら食べて静養なので回復に向かっていく気分にさせられていた。それにしても朝食時の人数と朝食後の人数に大差があるので不思議に思い、Kに「何処か行く所でもあるのか」と聞くと「お金を持っていますか」と驚く返事が返ってきた。私は「お金？」と聞き返し胸の当たりを触って内ポケット辺りに名刺位の薄い膨らみを確かめ「ある」と言った

。これは昭和十七年軍隊に入るとき餞別に頂いた一部を『お守り』と一緒に縫い付けていたものだった。Kは私がお金を持っているとわかると「ちょっと出ましょう」と誘い二人は裏口から外へ出た。

Kは歩きながら、自分は昭和二十年一月現地召集で第七国境守備隊に入隊したが、ソ連軍は第七国境守備隊へ攻撃せず、戦争もせず八月十五日天皇の命で武装解除し捕虜になり、シベリア北西部のコンスモレンスクのタイガーと呼ばれている森林で、氷点下四十度以下でも強制労働で伐採をやらされ三カ月で半数が死に、半数が自分のような病人にされ、戦争もせず無傷の第七国境守備隊は森林伐採で僅か三カ月で全滅したと話した。話を聞きながら自分がコンスモレンクスの森林伐採だったら果たしてと思うのであった。連れて行かれた場所は建物の反対側で三メートル位のフェンスが張り巡らされ近くに三、四十人の捕虜達が屯して両手で抱えるように煎餅のような食べ物をほおばっているのを見て私は不覚にも生唾を呑んだ。

フェンスの向う側では「焼餅・麻花＝シャオピン・マファ」と中国人が売声を出しているのだ。彼等の袖は手垢と油でテカテカに光った綿入れの中国服を着て、箱の両端に紐を肩に掛け駅弁売りそっくりなのである。品物はメリケン粉で作った焼餅と同じ材料を棒状にして折りたたみ油で揚げた麻花（マファ）である。Kは人差指と中指で日本の五円札を挟み「シャオピン・リャンガ＝焼餅二個」と買い「今度はおごってもらいますよ」と一枚をくれた。甘酸っぱいメリケン粉の焼餅が醗酵した匂いと胡麻と醤油の焦げた香が口の中イッパイに広がり、味覚を反芻するように噛み締め、久しく口にしなかった人間らしい食べ物とはこんなに旨いものかと味わった。敗戦国日本のお金が通用する驚きで売り買いを観察していると、統治者の『東北人民券』より、侵略者日本を追出した同盟国『ルーブル』の価値が高く、更にそれより『円』が高く流通していると分かり、帰ると早速お守り袋の縫目を根気よくほどくと、成田山のお守りと百円札一枚、十円札数枚が出てきた「これで暫くの間は薬り代りに栄養補給ができる」と、Kと顔を合わせニャとした。

私は、戦争に負けこの地域に何の影響力もなくなった日本のお金が今も流通していて、戦勝国のこの地方を支配している東北人民政府発行の「人民元」よりも、中国を日本から解放したソ連通貨よりも、幻になってしまった「円」がはるかに高いというのも驚きだった。Kが言うには「自分達がここに来た時よりも今は『円高』人民元の値打ちは半分以下に下落している」とか「この国は内戦中で国

民党軍が北安付近まで侵攻している噂も影響しているようだ」と。私は思いもしなかった理由で、思いがけなく多額のヘソクリを所持することになり、その日からKと一緒にフェンス裏でウロウロするのが日課のようになっていた。

暫くするとフェンス露天市の取引商品に衣料品が加わり始めた。大きな布袋を持った中国人が袋の中から、日本軍の戦闘帽子・軍服・シャツ・靴下・地下足袋などを首から下げ「交換、交換」と大声で売り始めたのだ。私達捕虜も春になれば荷物になるソ連で着せられた防寒外套・防寒帽子・防寒上着・防寒大手袋・防寒靴など荷物になるので、次の冬のことなど考えず交換し、差額を東北人民元で受取り、栄養補給の財源にする者が増えてきた。誰も皆、ソ連の「支給品」を処分することの後ろめたさは微塵も感じていないようであった。そしてあのいまいましい軍服を身にまとって、なんとなく安心感を覚えているのであった。

数日して驚く交換場面を目撃する。三人の捕虜が物売りの中国人と話し合っていたが、突然三人は着ている軍服を脱ぎ、中国人服と交換し身にまとい、当然とばかり受取った差額「人民元」で平然とした顔付きで「中国人顔」して焼き餅を買い食べているのだ。先覚者は勇気ある行動が求められるが、次からは流行になり、軍服を脱ぎ中国服と交換する者が急増した一番の理由は「差額の人民元」で「食べ物」が買えることであったが、私はそこまで踏み切る気持ちにはなれず「オレには出来ない」と数日先まで過ごしていたブラゴエの収容所の日々が蘇ってきた。

鉄条網に囲まれたブラゴエ収容所。ゲート脇の哨舎には自動小銃を持った哨兵数名が、四隅の望楼にも狙撃銃で狙いをつけている監視兵が二十四時間目を光らせ見張っている中で、来る日も来る日も雨の日も氷点下三十度の日も、貨物船に積み上げられた麻袋の荷下ろしをやらされ、その行き帰りの毎回の人員点検。収容所に戻れば大勢の仲間達が死と隣り合わせて床に伏している枕元で、総員何名・事故何名・事故の何名は足下の病気就床者・使役何名・現在員何名・番号一、二、三、四、五、…と大声で叫び、小説「真空地帯」同様の日々に身を置き「耐エガタキヲ耐エ」る天皇の軍隊の「しがらみ」から抜け出せずに汲々としていた自分と、いま目の前で軍服を食物にするために中国服と悪びれもせず交換する彼等との隔たりを否応なく考えさせられるのであった。

ブラゴエの収容所からこの収容所に移った時、私達は自分の目を疑った。出入り口の門は無人で銃を持った哨兵もいず、私達を監視する警戒兵の姿もなく、なにより驚いたのは「夏梅某以下何名、本日付ケヲ以テブラゴエ収容所カラ転出ヲ命ジラレ只今到着致シマシタコトヲココニ謹ンデ申告致シマス」の、今朝ブラゴエを出る時してたきた皇軍の儀式はここでは不要だと言うのだ。広い部屋の空いている場所を自分で見つけ隣の先住者に「よろしく」と声をかければここの住人に、朝礼も点呼もなく食器の飯盒を並べておくと食事当番がシャブシャブの粟粥を入れてくれたのを黙って食べて、次の食事までゴロゴロと虱退治や寝転び患者それぞのに任せた休養方法を与えているのだ。そして「腐っても鯛」と言うが敗戦国の「円」が一番の力を持っており私も百数十円の金持ちなのだ。

この収容所に来て一番喜んだのは初年兵達だった。天皇の軍隊は天皇の命令で階級制度が厳しく、割の合わないことや辛い仕事は「初年兵集合」と集め、初年兵にやらせ自分達は高見の見物だのだ。初年兵が解除されるのは次の新初年兵到着後になり、戦争に負けた今では初年兵が誕生することは永久こないのに、シベリアではこの組織が厳然と守られているのだ。一見〃ほったらかし〃のように思えるここの生活様式だが、世界一を誇った『日本軍隊の組織』を見事解体した凄腕の中国流におそれを感じるのであった。

真夜中、不意にパシュッと鋭い音で目が覚め、少ししてまた鋭い音が続いてきた。背を丸め目を閉じながら今日か明日かとこの音を待ちに待っていた喜びが、生きている確かな証となって耳に響いてきたのだった。口の中で『春だ』とつぶやいた。滔々と流れる黒竜江をピタリと閉じ込めていた氷が引き裂かれ割れて無数の氷塊となりひしめきあって流氷となり日本海へ押し流れていく様を想像する喜び、あの音を初めて聞いたのは初年兵から二年兵になった時だった。ソ満国境の最前線だった大五家子（タウジャウズ）江岸監視所から百倍の望遠鏡でソ連領の行動を監視する任務の時だった。突然の鋭い高音のパシュッに「敵襲」と身構えたのを古参兵が「あわてるな、ありゃあ二月下旬になると決まって黒竜江の氷が割れる音じゃ」と教えてくれ。歳月と時間からも剥奪されていた私が、今日は昭和二十一年二月下旬だと、少し人間界へ戻った日でもあった。

廊下の窓ガラス越しに早春の光りをいっぱい受けつつ虱退治の連中も、上半身は裸の甲羅干しでしばし余裕のようだ。一方フェンス露店も毎日のように来る露店商の中国人が「オイ、お前達も近いう

ちに南の方へ移動するのか？」と聞いてきた。『南へ移動』とは南下を意味し待ちに待った日本に近づく一歩なのだ。私達への第一報は物売り中国人なので皆、寝耳に水の驚きであった。移動＝帰国と藁おも掴む思いの私達にこの手の話はソ連兵から「トーキョウダモイ」とか「コックリサン」のお告げなどについ感わされているだけに、こんな話にも飛びつくことはなく、出来るだけ冷静に話の出所を聞き出そうとした。

Q「そのような話は何処の誰が言っていたのか」

A「江岸南の収容所の日本人から昨日聞いた」

Q「一人か二人が言っただけだろう」

A「イヤ、収容所の役人が捕虜全員に話したと聞かされた。それに昨日から防寒物を交換に出す者が増えてきた」この話は他の中国人も相槌を打った。

（これが本当だとすると…）私達は考えを変え相談を始めた。向こうの収容所だけ何故移動計画の発表がなされたのか？。ここには何の音沙汰もないとはどういうことだ。向こうの捕虜と我々との間に区別される理由があるのだろうか。するとKが「その辺の事を聞いてみます」とKは幾つかの質問を中国人にしたようだ。今度は中国人がなにやら話し合い結論をKに話した。Kはうなづいたり聞き返したりしてから「江岸南の日本人と私達の違いは、向こうが私達より七歳から八歳年上だけだ」と言うのだ。年齢差だけでも疑問だが、更に疑問なのはこの付近一帯は国境なので現役兵で防御していて私達と同年齢でなければ腑に落ちない。年齢が七、八歳上ということは兵隊でなく民間人か、民間人…すると彼等は非戦闘員だから早く帰れるのかと。イヤな予感が迫ってきて皆次第に無口になっていった。

次の日もフェンス露天へ行くと昨日の中国人が「やっぱり話は本当だよ。江岸南の日本人は北安（ペーアン）まで行くらしいよ」と自分達の情報が間違っていなかったことを強調した。私達は彼等の情報が自分達に及ぶものではないと知りながらも、またもやガックリとショボクレはしたが、一夜明けるとブラゴエの時のような後味の悪さを引きずることはなく「北安まで行くって、線路もないのにどうやって行くんだ」とか「歩くこともむつかしい病人はどうするんだ」とか心配する精神的余裕も少し芽生え出したようだ。ここ黒河と北安間の鉄道線路３０４キロは前述通りソ連がレールは勿論、枕木までシベリアへ略奪。道程は街や集落を結びながら３５０キロにも及ぶことは国境守備隊兵なら全員知っているのであった。

それから数日後の朝、食事当番がいつもの粟粥を配りながら「食事が終わってもそのまま待つように」と言って回り、中国人の物売りから聞かされた「南下」の良き知らせかと、いつにないざわめきながらの朝食であった。ほどなくして黒服の東北人民政府の役人二人が私達の真中へ入ってきて立ったまま一人の男が「中国語」で少し話。もう一人の男が流暢な日本語で「私はSと言いますと名乗り、収容所長の言われたことは、三日後に皆さんを北安へ移しソ連から日本人の病人を迎える。移動は野宿しながら徒歩」だと説明し細かい指示が、それは努力と根気で解体した帝国軍隊の組織を復活さす組織づくりでもあった。私はお金の使い方を教えてくれたKと、上官風を吹かせないSと開拓団出身の補充兵Fとチームを組むことにした。

昭和二十一年四月下旬、よれよれの軍服、中国服、地下足袋に飯盒と雑嚢、ペラペラになった毛布を肩に掛け服装も哀れなら体力もない病人が黒竜江の河原へ集められた。既に三、四百人の一見私達よりも四、五歳上の捕虜が服装は私達同様だが、大きな荷物や手製のリックを背負い私達よりも物持ちだと思った。フェンス露店商の中国人が言っていた日本人だと思った。私達の周囲には五、六十人の「東北人民解放軍」という胸章を付けているが、階級を表わす表示がなく階級不明の兵士と、解放軍と一緒に働いている日本人等が幾つも運ばれてきた麻袋を開け、小隊別に穀物と岩塩、マッチを手際よく配り、私達も一週間分の粟の現物・岩塩・マッチを受取った。説明によると一日分の粟を炊き、食べ食べ野宿をしながら一週間で病人が三百五十キロを踏破して北安へ辿り着くというのだ。四～五十台の馬車には歩行も出来ぬ病人が不安そうな面持ちで乗せられ名簿と本人の確認も終ったのか、バタバタ走っていた兵士達も隊列の両側に立っと、前方で笛の音が聞こえ「出発」と号令で、馬車の御者台の中国人が棒の先に付けた長い皮の鞭を高く振り上げ空中で一発パシッと鳴らすとゴットンと馬車も私達も歩き出した。

私は去年の秋、この大河の下流孫呉からここ黒河まで歩かされ、ソ連領へ連行以来である。あの時は四列縦隊少しでも隊列が崩れると両脇を数メートル置きに固めていたソ連兵が自動小銃の台尻で背中や尻や足を小突きまわし「ドバイ、ドバイ」を連発した。この行軍も同じように勝者「東北人民解放軍」の兵士が私達全員を、責任を以て北安に引率するため時には厳しく、小突き回される屈辱に耐える情けなさを覚悟していたが、病人、半病人の集団でもあるのか、隊列が乱れても厳しい叱責もなく大目に見逃しているようだと見

受けていたが、そうでなく100％私達の歩行まかせなのだ。病人ばかりだから早や落伍者が現れてもチラッと見るだけで、励ましも収容する手配は皆無なのだ。このままでは行路死が出現すると心配した。

小休止を挟んで数時間歩いた頃、高粱殻で屋根を葺いた低い土塀の家が疎らに建っている集落に入った。人影はなく暫く進と五メートル四方の建物の敷地内に破壊されたコンクリートの基礎を雑草が覆っていた。私は思わず「大五家子望楼跡」だとつぶやいた。紛れもなくこの上に高さ十五メートルの望楼を組み、通信機材や地図、百倍の望遠鏡を備え私も勤務した国境警備第一線の場所だ。夜になるとソ連領から音もなく赤、黄。青の信号弾が打ち上げられ、それに呼応して満州領からも打ち上げられ、私達は軍犬も加勢させ逮捕に走ったが毎回逮捕できず周到な準備と徹底した警戒心の強さに翻弄され国境はいつも緊迫した空気に包まれていたのであった。そしてこの警備の連続が大満州に生活している日本人の命と財産を守っている誇りだと自負していたのであった。

現地点で炊事、野営と伝達された。私達四人は二個の飯盒で粟飯を炊き、二個の飯盒に食べれそうな野草の塩汁、それも熱々の粟飯と塩汁は収容所の生温るさもなく比べものにならない美味しさであった。天幕もなく直接星空から夜露が全身を覆う野宿なので開拓団出身のFが「あの辺に幾つも積んである粟殻の山があるだろう。今夜はあそこえ潜って寝よう」と連れ出した。粟殻は私達の身長より長く束ねてあり、束ね山の縄を解いて適当に並べ寝床にした。粟殻が出す白酒（ハイチュ）のような香りが体全体を包み久しぶりに良い眠りをしたと朝を迎え、寝床にした粟殻を片付け始めた頃解放軍の兵士が「君達は昨夜、沢山の粟殻を引っ張り出しその上で眠った。他の連中も君達の真似をして積んである粟殻山を崩した。誰に断って誰の許しで人の物を使ったのか、これは農民達の大事な副収入の材料だと知っているのか、私達の軍隊は借りたものは必ず元通りにして返す。要るものは必ずお金を出して買う。君達も私達と行動を共にしているのだから、後ろ指をさされることのないようにキチント片付けてほしい」と。Kの通訳は私達に人間としての恥をしらしめるものであった。

「それでも」とFが口を開いた「オレ開拓団にいたからこんな藁殻でも貧しい農民には大事な収入源やとは知っとる。あの兵隊に言われんでも知っとった。そやけど三年以上も軍隊の飯を食っとる間

に満人を人と思わず、こんなものぐらいと思う気持ちにさせられてしまっているんや」このFの言い訳とも独言ともとれる言葉が私の今までの体験を呼び起こしたのであった。

大五家子監視所勤務中、日本の一月元旦に当る春節に朝水本部へ馬橇で食料受領を命じられE上等兵と新兵の私は、馭者をさせる農民を集落へ探しに行った。粗末な農家の玄関を支える両側の細い柱に短冊ほどの赤紙に〃新春発財＝シンシュンパーサイ〃と墨痕鮮やかな筆文字と〃連〃が張り付けてあり貧しい乍も精一杯春節を祝う雰囲気であり、農民は薄暗いオンドルの上に横になりお酒も入り、長いキセルで煙草を吸っていた。国境なので私達は実弾を装填した銃に剣を付け人を突き殺せる軍装なのだ。農民は正月早々剣付き鉄砲を持った（日本鬼子＝リーベンクイズ）が二人も乱入したので腰を抜かしビックリ仰天、飛び起きて膝を抱え震えている。Eは馭者をやれと命じた。農民は両手を合わせ三拝九拝し今日はご勘弁をと哀願した。Eは銃を私に渡すと土足のまま上がり無言で農民の胸倉を掴まえいきなり五、六発殴り土間に引きづり下ろし「文句を言わず支度せよ」と倒れている農民を防寒靴で蹴り上げ呆気にとられ傍観している私にも「てめえの様にただ突っ立っているから満人になめられるんだ」と私のみぞおちにも一発一瞬息がつまった。そして私も三年後には『陳＝チン』と呼ぶ満人を「名前がおそれおおい」と殴っては、溜飲を下げている連中の一人に変貌していった。

Sが「立つ鳥後を濁さず」と言って率先して粟殻を片付け、それをFが長い縄で縛り上げ元通りに復元した。

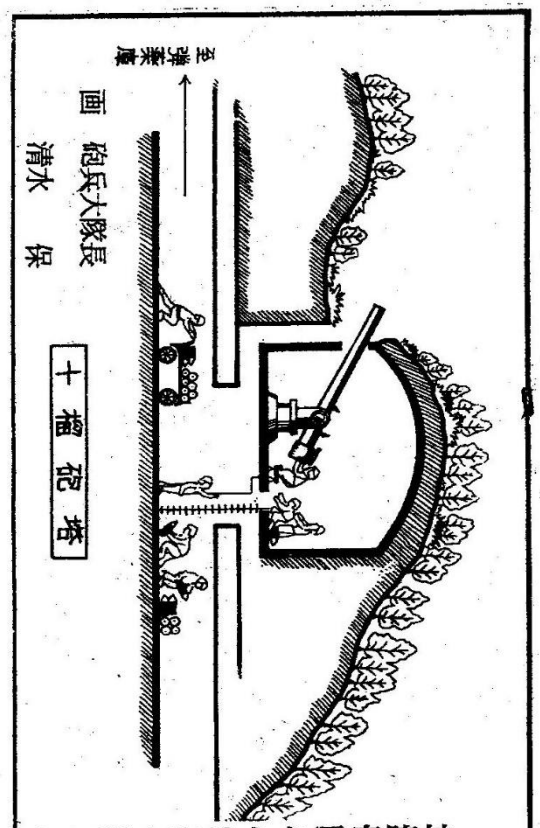
この事件後、私達に注意した解放軍兵士の言葉や態度が気になり歩きながら考えるようになった。私が東北人民解放軍兵士と始めて顔を合わせたのは今度の移動のため集まった黒竜江の江岸だった。私はその少し前まで人を人間扱いしないソ連にいて病気にされ、やっかい者扱いの無価値者と中国へ放り出された。一方的に病人の受け入れを強制された中国にもお荷物で、捕虜であることには変わりないのに、ソ連兵と違うのは病人に対する看護兵の態度だったので私はこの徒歩行には耐えられると思っていた。

私が知っている中国人はこの最果ての国境に駐屯する日本兵の近くに居住している貧しい先住民族で、それを後から来た日本兵に一方的に武力で便利屋にされ物資輸送や労役要員に組み込まれ「モタモタするな」と罵声を浴びせられても不平不満も言わず黙々と従う

のであった。無理難題を課せられても心の奥底を見せず「没法子＝メンファズ（仕方がない）」の言葉を一度口に出すと、全てを忍び耐える姿に一変する凄さを感じていた。外からの力で運命を無法に変えられどん底に突き落とされても「没法子」の一言で従容と落着き、乱れず受け入れる凄さを。一方私達は「耐エ難キオ耐エ」という天皇の命令に服することであり、それは「わが国の軍隊は世世天皇の統率し給うところにぞある…」という軍人勅諭の体現にほかならないと思っていた。

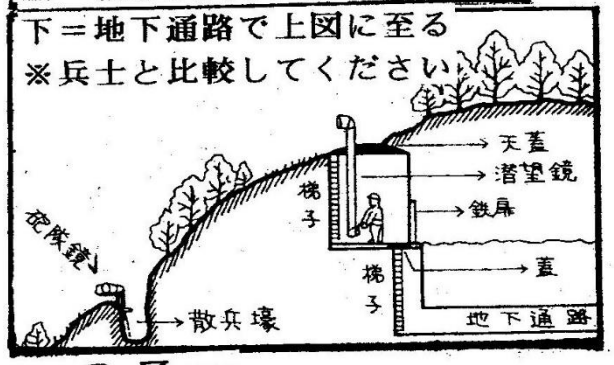
黒河を出発して二、三日経過した。Kが解放軍兵士達の会話を教えてくれた。我々は千五百人以上で今行列の長さは延々三十キロにもなって既に力尽きて死者も出ていると。私達四人は無性に腹が立った、シベリアへ強制拉致し過酷な労働と飢餓食で大勢の死者と病人を発生させ、使いものにならない者は日本へ帰そうとせず黒河へ追放し、北安迄の線路を捕虜に剥がさせ自国へ運ばせたので、私達はその区間を病人なのに歩かされているのだ。解放軍兵士達は自分達のペースに歩くのを強制せず、病人は病人並みに任せているようだ。歩く力が尽きた場所が『墓場』となる日本への南下行だのだ。

黒河を発ち七、八日目、配給された食料は一週間で北安まで歩けだが、病人の足並みでまだ1／3の行程のようだ。隊列は私達の前後を歩く姿もなく延々と波打つ畑の畝をダラダラと。へたばり休んでいる者を追い越す毎に「この道で良い」と確認するのだった。目の前に連なる山々の形に見覚えの記憶がと目を凝らしていたが、その中腹にコンクリートで固めた矩形の砲眼が穿がかれて私が昭和十七年から三年間過ごし、昨年八月ソ連軍攻撃に対しK軍曹と初年兵達が必死の防戦を展開した朝水陣地なのだ。



上＝朝水砲兵永久要塞陣地

下＝地下通路で上図に至る
※兵士と比較してください



明治維新後、列強入りを目指し日本は「富国強兵」「帝国主義」で満州に傀儡国家を建設しソ連領と対峙する国境に守備隊を配備した一つが朝水陣地だ。陣地の構築は昭和六年自作自演の満州事変の翌年、昭和七年頃から労働者募集でなく、中国北支に侵攻した日本軍が華北で精悍な中国男子を拉致した者達で労働賃金は阿片だ。阿片中毒にし阿片欲しさに働かせると云う狡猾な手段を用い昭和十三年概ね工事は完了。巨大な永久要塞の秘密を守るため労働者を抹殺し陣地の谷間に埋めた。陣地は小興安嶺の支脈が黒竜江の江岸に果てようとする山々の内部をくり貫き厚さ一メートル五十センチの鉄筋コンクリートで固められ、内部は部隊の休憩室（兵室）救護医務室、炊事場、兵器・弾薬倉庫等が完備され、照明は発電装置、戦闘指揮所、観測所、砲塔などの主要は武装した部隊が二列で歩ける地下通路で結ばれ、陣地のいたる処に機関銃、山砲のトーチカが配置され、十五センチ榴弾砲、十センチ加農砲、高射砲は三十ミリの鋼板に護られた三百六十度回転する砲塔に据えつけられ、砲弾の運搬はトロッコを用い。日本はこの地一帯を勝手に「北を鎮める地」『北鎮台』と命名した。

※第二十二回戦争体験を語り継ぐ集い　体験記録集第十七集より、陣地構築に従事した長尾竪造　東京都　第六国境守備隊工兵隊の証言を再録します。　編集係。

建築業の私は満州小興安嶺山中にある工兵隊に現役入営。工兵中佐の指揮で歩兵、砲兵、通信兵、工兵混成で兵一人に十名前後の苦力（クリー＝肉体労働者）を使い陣地構築。私は（木匠＝ムージャン）として平射砲用一門、９２式Ｍ・Ｇ用、１４式Ｌ・Ｇなどの掩体作りを担当した。苦力は中国山東省を侵略進行中、農作業の屈強な男子を兎狩りでもするように一網打尽拉致し、ソ満国境の陣地構築に送り働かせた。一日の作業が終わると苦力に二粒の阿片を渡すのです。喜びましたね。皆が吸っているでなく吸わない者もいました。阿片の魔力は大変なもので、阿片が切れると空のモッコも持てないが、阿片吸口に付着しているヤニをなめさすと、忽ち元気百倍土を山盛りにしたモッコ二つを天秤に担ぐのです。おどろきましたね。その魔力に。麻薬漬け、阿片中毒にして、阿片を貰える喜びで一所懸命働かせたのでした。入隊一年で一等兵に、精勤章も貰い上等兵候補者を命じられた。これは同期者上位５％の成績優秀で陣地構築から離れ佳木斯（ジャムス）独立工兵隊へ派遣される。

派遣先で上等兵になった私は入隊四年目、ハルピンに出張を命じ

られ市街で、和服姿の同年兵村田に会う。村田は三年の満期で除隊して一般人に。当時の話になり、村田も私も使っていた苦力は工事完成と同時に、秘密保持目的で全員殺したという。驚いた私は出張ら帰ると満期除隊を直訴。善行章と下士適をやるから辛抱せよ。と、断ると、態度がデカイと、自殺防止でボタンをちぎられ紐類もハサミで切られ営倉に入れられ、食事は麦6、米4、まずくて喉を通らず。就寝以外は板の間に正座して「軍人勅諭」の清書。それでも意志を曲げず頑張ると、精勤章を剥奪され一等兵に降格され四年半で除隊、一般人になる。

おふくろは「仕事はゆっくり休んでから」と、ねぎらいの言葉。除隊して一週間目に区役所から「長尾さんおめでとうございます」と、召集令状（赤紙）温厚なお袋が宮城の方角に向き正座して「天子様あんまりだ。息子がそんなに憎いのか」と、はらわたから搾り出るような呻き声で泣いた。以下略。

※本文〃棄民のあしあとに戻る※

この陣地に昭和十七年配属された私は三時間死守を叩き込まれ、背嚢を背負った完全軍装に防毒マスクを装着し「突撃」の命令で「ウワァァ」と喊声を挙げ突込む訓練の繰り返した足元は、北限特有の湿地帯に根っ子が大西瓜ほどの丸く固まる水草かひしめき合い足を滑らすと、腰まで湿地の中へ沈み抜けなくなる。初年兵係上等兵は「モタモタするな孫呉熱で死ぬぞ！」と怒鳴るのだ。「孫呉熱」とはこの湿地に棲息する寄生虫が原因の風土病で衣服から皮膚を通り体内に入ると高熱で死に至るのだ。演習が終わり兵舎へ戻ると自分のことは後回しにし、真っ先に班長と初年兵係上等兵の巻脚絆、帯剣、軍靴を奪い合いピカピカに磨き上げ「〇〇二等兵班長殿の軍靴を持って参りました」と下士官室の扉を叩き「ご苦労」の声を聞いてから自分の小銃、剣の手入れと濡れた衣服の洗濯。「飯上げ」の使役、飯を丸呑みで食べ終え、食缶返納。点呼準備の掃除、防火用水の水換え、痰壺の清掃、厠の掃除と追われ、これらを誰が率先してやっているかと、古年兵は目を光らせているのだ。休む間もなく哀調をおびた『消灯ラッパ』で消灯就寝。眠るのを待つかのように「初年兵起きろ」の大声で飛び起きると奇麗に磨いた痰壺か汚れていると難癖を付けられ「全体責任」で殴られてから深い眠りに、これが毎晩続くのだ。爆弾を抱いて戦車の下に飛び込む訓練は負け戦になってからであった。

今日で何日歩いただろう。貧しい造りの集落ばかりだったが、貧しさの中に少し土塀や柳楊が立ち並ぶ集落に入った。道の両側に日

本軍の毛布、テント布地を敷いて、日本軍の軍服、靴などを並べ私達を相手に「安いよ、交換、交換」と客寄をしている。私達は品物の交換よりもまず、今までより少し大きいこの集落が何処なのか知りたいのだ。聞くと「北孫呉」だと、なんとかここまでという安堵感とともに、これから先が思いやられた。露天商を見て回ると沢庵、味噌、梅干しと「純粋な日本の匂い」に立ち尽くした。売手は「安いよ、安いよ」を連発し、ヘソクリで食い尽くした食糧と一緒に日本の味も買い、集落から離れた井戸の水で「野草の味噌汁」粟雑炊に沢庵と梅干しと豪華な晩飯に、私達は又もや喋り尽くした「ふるさと」の話を喋り続けていた。

今までは道の両側に湿地が多くその湿地を覆い尽くすように山蕗に似た大葉が茂っていたが、次第に湿地も少なくなり道幅も広くなると一転して高粱、玉蜀黍、粟などの苗若葉が葉音をたて、遙か遠くまで畝が連なっている光景が目に入った。私達四人は言われなくとも北満州最大の穀倉地帯だと承知していた。昼食は畑の傍らで土の匂いの中でした。Fは「この付近一帯の土地は肥料なんかやらなくてもよい肥沃土でその厚さはオレの背丈より深いんや、肥料をやらなくても玉蜀黍は背丈が三メートルも伸び良い実をびっしりつけるんや、オレが居た勃利（ボツリ）もこの辺の土壌と同じや」と言い勃利の方角を指差し更に言葉を続けた。

「オレ等小作農は自分の農地が持てる満州に開拓村を建設に来たんや、みんなで力を合わせ開墾して、収穫ができるまで何年かかるか判らないが頑張ろうと励まし誓い合い、脱落はしないと約束したんや。割り当てられた入植地へ入ってビックリさ。開墾などしなくてよい農地、良く手入れされて、いま直ぐ種蒔きができる広大な農地を貰ったのさ、でもその農地は満人（中国農民）のをタダ同様で取り上げ俺達に分配したと聞いて何とも後味が悪く不安だった」と話した後「…女房と子ども達は今頃どうしとるのやろ…」と目を伏せた。始めて聞かされた三人は彼になんと言えばいいのかわからないまま、黙りこくった。

※夏梅氏の手記を中断し、満州棄民知らされていない《黒河～北安間・日本へ死の徒歩行》を、本会戦争体験を語り継ぐ集い「戦時体験記録集」バックナンバーよりを抜粋再録します。　※編集係

※ソ連は七十万人以上の日本人を戦後復興労働力として拉致したが、長年にわたる戦争で管理統制能力も低下し、やみくもにノルマ

設定し銃口を向け強制労働させたが、日本人の誰もが体験経験していない夏服に世界一の寒冷地の酷寒。更に飢餓が加わり、衛生面劣悪で虱による発疹チフスが蔓延し抑留一カ月で日本人の多くは栄養失調に陥った。十一月には結氷した黒竜江の氷をバールで穴を開け日本人の死体を流し込むのを黒河から丸見えで多い日は六十体を超えたと言う証言もある。

ソ連は拉致し強制労働させた病弱者と、国際法に抵触する十八歳未満者を日本へ帰そうとせず黒河へ追放した。敗戦後満洲（中国東北）は政情が悪化し、国民同士が交戦し治安皆無の戦場であったが、黒河を支配していた国民党光復軍は、ソ連から一方的に逆送されてくる日本人病人の収容に苦慮し、黒河旧満鉄の官舎と寮を南崗収容所と命名し病弱日本人約千五百名を収容。この頃の死者は一日二十八～三十人と証言した者がいる。

二月、黒河の光復軍は八路軍に破れ、黒河は八路軍の支配下になった。八路軍も一方的に送りこまれる病弱日本人の収容に「南崗収容所」の他に、日本統治下の警察訓練所、日本商社江岸倉庫を収容所として千三百～千五百人収容し、更に日本統治時代の陸軍病院、一般病院にも収容、これらの廊下で死ぬ者が続出し「つたや旅館」を第二病院としたが対応しきれず。黒河より三百五十キロ南方の「北安＝ペーアン」へ徒歩移送を強行し、ソ連からの送り込みに対応しようとした。

昭和二十一年三月二十八日、千二百名を第一梯団として北安へ向け南下させ、北安到着一番は十五日後の四月十二日。約八百名が到着し、約四百名は行路死。第二梯団は四月七日千五百二十二名で出発。北安到着一番は十三日後の四月二十日。約三百名が行路死。夏梅氏は四月下旬黒河出発と証言しているので第三梯団と思われる。第四梯団は八月十五日と言う証言者もいる。第二梯団が北安に辿り着き驚いたは第一梯団がそっくり北安に残留していたのであった。これは第三梯団も北安に到着すると第一、第二梯団が北安で足踏みさせられていたことに驚くのであった。

北安の八路軍は黒河より送り込んでくる日本人を列車で南下させようとするが、松花江南岸からは中国国軍の勢力下で日本人の受け入れを拒否。理由はソ連は引揚げる時、南満州の穀倉地帯の昭和二十年秋の収穫物は勿論、家畜の餌まで食べられる穀類は根こそぎ略奪。今は無政府状態で南満州の街々は飢餓状態。又、八路軍側も中

国軍側へ行かせれば武器を与え敵にされるから渡すなと意見もあり。蚊帳の外の日本人には何も知らされず、ただ南下帰国の一念だけに拘わり《黒河事件》を発生させたのであった。

八路軍は黒河の病弱日本人収容者を、第三梯団まで北安へ向け出発させたが、ソ連からの追放日本人が続くので、第三梯団出発後の四月下旬、収容中の日本人から労働希望者を募集し収容所外に宿泊させた人数は二百八十人。労働先は八路軍司令部、清掃、商店や農家、自動車整備他十二労働先であり、収容所内の日本人食事も八路軍兵士と同じ食べ物を同じ席で、肩を寄せ合い食べるまでに信頼関係を築く努力をしていた。六月十日、黒河八路軍の手薄な個所を光復軍が二日間攻撃し大打撃を与えた。八路軍が光復軍の戦死者を調べたら三十人余の日本人戦死者の中に、収容所労働希望者がいて八路軍は収容所の日本人が内通していると考え、連日連夜厳しい取り調べを繰り返し遂に責任を取らされ銃殺刑にされた者も出た。

黒河の日本人は北安以南の足止め理由も知らず、第一梯団から第三梯団までの引率八路軍兵士が一人も帰ってこないことにも疑惑を抱き、ソ連でも騙され続けられていたのが爆発し、炭坑へでも連行されていると疑心暗鬼に陥り、八路軍を頼らず、少しは知っている満州の地だ、日本人だけの力で南下するには六月中でないと冬までには大連や釜山に着けないと、発案する者が増えてきて六月二十一日午前〇時収容所脱走と決め、八路軍監視兵八名を撲殺武器を奪い約五百五十余名が脱走し半数が捕まり死刑されたのが《黒河事件》《黒河事件》このような人達の証言。

◎第十六回戦争体験を語り継ぐ集い　体験記録集第十一集より

〇西向　克己・神戸市・第六国境守備隊歩兵一中隊

第一梯団で出発後、孫呉で遂に力尽き、同行の仲間にも見捨てられ、このまま眠り死ぬと覚悟した時、夜盗巡回中の八路軍兵士に尋問され「食べる物がありません仕事を下さい」と流暢な中国語で話しかけたら「言葉と計算の出来る炊事係」を探していたと採用され、孫呉八路軍自動車隊の炊事係になる。六月の終わり頃、北安から黒河へ急派される八路軍幹部将校が自動車隊で車交換、炊事場で休憩中、自動車隊隊長に「黒河に収容されている千人以上の日本人が、我々の番兵八人を殴り殺して逃げた。我々は逃げた日本人を捕えるのだが、逃げなかった日本人まで手引者として処刑している。毛首領はこれ以上日本人を殺すな、殺された日本人の子が殺した中国人の子を親の仇と殺し際限がない。殺しあいを無くするために中国人は我慢せよ。私が早く着くと助かる日本人が増えるのだ、一番早

く走れる車を出せ、毛首領と日本人ために」殺しに待ったをかけに行く。この証言は黒河事件を調査している橋詰達を驚ろかせた。

○橋詰四郎・豊明市・第六国境守備隊歩兵十中隊

シベリアから生還。引揚援護局で児玉与左衛門が橋詰の同年兵、菅井義男は昭和二十一年六月二十一日黒河で死亡と証言を知り。菅井の本籍地役場を通し母親の居住地を探し出し、母親を児玉与左衛門・滋賀県東近江市八日市へ案内、児玉は婦女子八名を引受け六月二十一日午前○時脱走した《黒河事件実行者》菅井は四月労働を希望し中共軍官舎労役で脱走日時を知らせることが出来ず、内通者として殺されていると予想し申し出たが「死」は確認はしていないと証言。母親は帰路名古屋駅に着き別れるまで、息子の「死」を見た人が現れるまで義男は生きていると言い続けていた。

◎第十六回戦争体験を語り継ぐ集い　体験記録集第十一集より

○上村喜代蔵・豊橋市・第六国境守備隊大隊本部。

入ソ後、発病し黒河へ。体調が回復に向い北安まで三百五十キロ歩く体力造りにと、八路軍の労働募集に応募。八路軍将校の引率で十二名が北鎮台、二站に宿泊し日本軍の隠した武器弾薬発掘と、放置されている双方戦死者を埋葬。一緒に働いている土民より「光復軍に入ったら日本へ帰す」と言われ、引率将校を殺し光復軍に寝返る。光復軍は移動中の八路軍や部落を襲い山賊同様に加え指揮官は阿片中毒で困り、オロチョンに頼み指揮官を殺して貰い、光復軍兵士ともども中共軍へ再寝返るが、上村はオロチョンを選びオロチョンと生活し、昭和二十八年（１９５３）十月帰国。私達に「少年岩間典夫オロチョンで生存」と告げるも国交がなく、岩間と通じ合えたのは昭和四十九年（１９７４）であった。

◎第八回戦争体験を語り継ぐ集い　体験記録集第三集より橋詰記

○オロチョン日本人・岩間典夫（莫宝清＝マオパウチン）のこと

開戦と同時に陣地に保護した非戦闘員の一人、小輩（ショウハイ）子どもと呼び弾薬運搬に、兵と一緒に入ソ。シベリアで岩間の仕事は、ロシア人医者が指さした日本人を二人で氷点下三十度の屋外へ運び出し凍死さす役。毎日トラック一台分になると証言。十八歳未満者の抑留は国際法で禁止されているで翌年三月、病弱者と一緒に黒河へ追放され単独で北安まで辿り着き、食べ物を探している時、八路軍兵士に「腹一杯食べよ」と水ギョウザを。義勇軍に入隊で家を出てからこの時まで腹一杯食べた記憶がなかったと回顧している。昭和二十一年五月八路軍は馬車百台に物資を満載し十五名の警

備兵で移動中オロチョンが攻撃、岩間は馬車毎オロチョンに捕まりオロチョンに定着。狩猟民族オロチョンに地場産業、牧畜、果樹園経営等を教え狩猟民族定住に貢献し、黒竜江省遜克県政治協商副主席（日本＝副知事）六十歳で定年を、共産党と人民の要望で定年二年を延長し、平成八年（１９９６）六月十三日六十七歳で帰国。

◎第十八回戦争体験を語り継ぐ集い　体験記録集第十三集より

○山岡　三夫・名古屋市守山区・第六国境守備隊八中隊

八月二十二日降伏、九月下旬シベリアへ、発疹チフスに罹り二月二千から二千五百人の私等病者は、ゴミを捨てるように黒河へ徒歩で追放された。黒河は政府軍の管轄であったが、八路軍に攻撃されご主人様は八路軍に。四月体調が回復したので労働募集に応じ八路軍官舎で宿泊労働、六月十七日官舎の屋根修理をしていたら、武装した日本兵が馬を飛ばしてきて「戦争が始まる逃げろ」と教えてくれ穴蔵へ逃げる。最初は劣勢だった八路軍が態勢を立直し撃退。敵の戦死者に多数の日本人が混じり大騒ぎになる。労働募集で採用し現地泊まりの作業現場へ政府軍が黒河を占領すれば、日本人を皆帰国さすと勧誘したと判る。このままでは中国の内乱に巻き込まれ帰国は出来ないと風評が高まり、二十一日午前〇時、婦女子二百五十名を含む収容所の半数、約五百五十名が監視の八路軍を殺し脱走するが、労働募集に応じ収容所外の宿泊者は逮捕されてから知る。

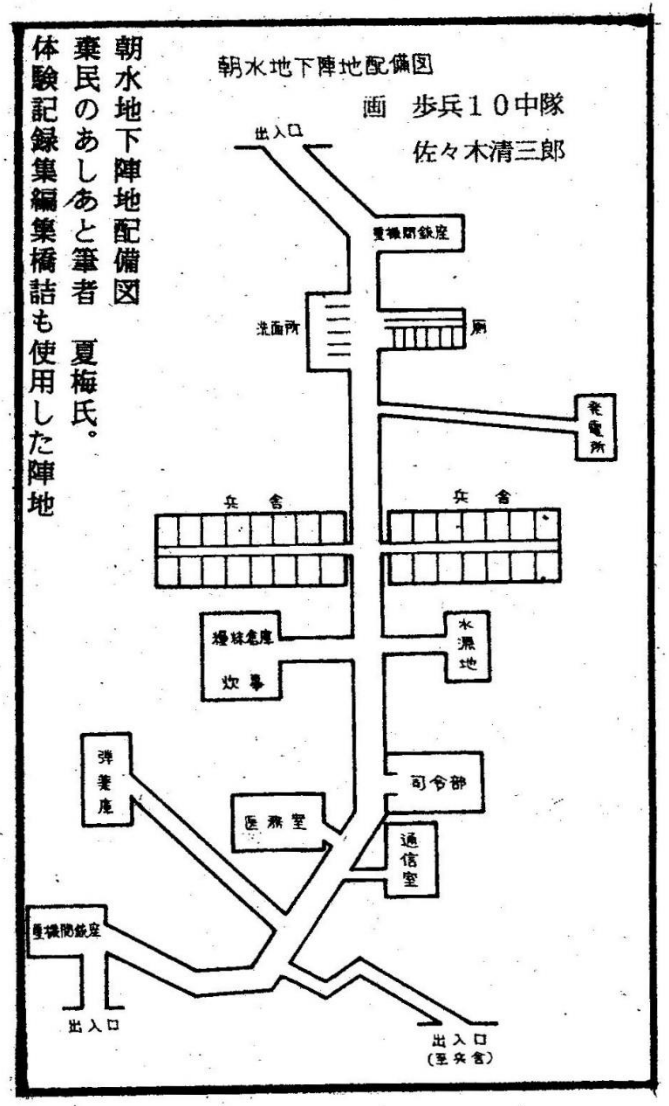
公安隊は脱走せず残った者と、労働募集で収容所外宿泊者全員を逮捕投獄。私も連行されるので荷物を持とうとしたら「殺されるから荷物は置いていけ」と言われる。毎日監獄の薄暗い大部屋へ片手に蝋燭を持った兵隊がきて、顔を照らし「お前とお前、そこの五人」と一回に二十人ほど連れだし銃殺。蝋燭を持った兵隊は閻魔大王の使いなのだ。監獄の中は銃殺で少なくなって四日目「官舎組出よ」で私一人だけ呼び出され遂にと諦める。出ると官舎の兵隊が「間に合った山岡良かった」と涙を流して喜んでくれ。官所に着くと所長以下全員で迎えてくれる。公安は、黒河の日本人と政府軍の連携を疑い、見せしめ刑で実体を探ろうとしたのだ。毛沢東主席が公安が黒河事件の関係日本人銃殺を知り、殺され殺しては際限がない、殺された日本の子が復讐でまた中国人を殺す。止める方法が一つある。それは今、中国人が我慢することだ。と、銃殺中止の命令を出したのを所長が公安より早く知り、公安隊に交渉して早く出られ、他の人は三日後と聞きました。

敗戦一年後の昭和二十一年八月十五日、日帝撃滅独立解放万歳の

チラシが黒河に貼られた日私達は、三百五十キロ先の北安へ向け婦女子を含め約五百人が歩けない病人は馬車に乗せ、強盗の襲撃に備え八名の八路軍兵士が付き、野宿しながら徒歩で出発しました。私は女性も入れて五人で励まし合い歩き、二日で九十五キロ歩いて孫呉到着。中国人農民に助けられた日本婦人が、一緒にお願いと泣いて頼むのを、馬車の本隊にも護衛の八路軍にも見捨てられ、自信がないと振り切ったりして、とうとう水も飲み干し食べ物もなく農家に倒れ込むと、生水を飲むと体に悪い暫く待ちなさいと沸騰湯や食事を作って腹一杯食べさせて貰い、一泊して明日立ちなさいと。出発には煙草はあるかお金はあるかと持たしてくれ、弁当は重いから二人で担げと棒まで用意して日本では考えられない言葉と親切にしてもらいました。

黙々と歩き何時の間にか五人に連帯感が芽生え、それぞれが仲間から離れたら死ぬと思うようになる。集落の名を聞き後九十キロで北安だと最後の力を振り絞り歩くも五人とも限界。極限以上遂にここが墓場と観念して座り込む。二人の八路軍兵士が通りかかり「何処から来た」「黒河」と言うと驚き、故障したトラックを取りに行く乗せてあげると言う。道が悪く揺れるから前に座りなさいと気配して頂き、湯茶の接待も受け北安収容所の玄関で降ろしてもらう。

驚いたのは五カ月も前に出発し日本に着いているはずの第一梯団から全部残っているのだ。北安で足止めと判っていたら《黒河事件》は発生しなかったと思う。残念でなりません。



朝水地下陣地配備図
棄民のあしあと筆者　夏梅氏。
体験記録集編集橋詰も使用した陣地

特攻出撃前の頭の中

元関東軍第六国境守備隊歩兵五中隊　稲葉　迪夫

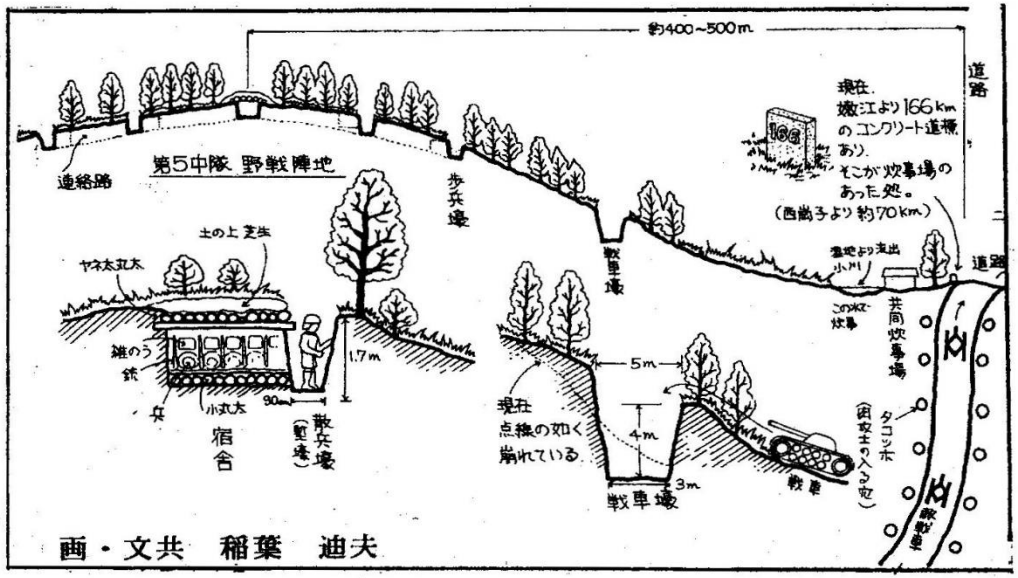
関東軍第六国境守備隊は歩兵十個中隊、砲兵四個中隊、工兵一個中隊。現中国東北、黒竜江省曖琿～朝水間に前頁図の永久要塞を築城。ソ連軍を最低三時間死守の任務を課せられ、この三時間で南満州の関東軍が戦闘準備完了の玉砕部隊なので。昼夜ソ連戦車軍団攻撃の肉迫特攻演習に励んでいた。

八月九日、眼前の黒竜江を渡河しソ連軍の攻撃、砲兵は砲弾を沖縄、九州へ送り弾丸の無い砲兵から対戦車破甲爆雷を背負い肉迫特攻出撃。歩兵は左図の野戦陣地や前頁の地下陣地で死闘を展開『空の戦友一機一艦・我ら一人一戦車』と。我が五中隊も肉迫特攻命令が下り、出撃順を籤で決め二階級特進の栄誉。後順の私は「俺も後から行く、靖国への道案内を頼む」と出撃する戦友へ。先陣の戦友は「オー靖国で待っているぞ」と。一人も帰ってこなかった。

私の出撃は二十一日早朝と、十九日に命令され、武士道に倣い褌から軍服まで着衣全部新品を支給され、覚悟は出来ているのに、新品に着替える気力が湧き出てこない。これが死出の旅衣装かと…

明日死と迫ると……上官や戦友の激励も上の空。夜が明けたらと思うと一睡も出来ず、父母、兄弟、親戚、氏神の祭り、運動会、山や川が脳裏に、自分の弱虫を叱り靖国神社、天皇陛下を頭の中へと努める。お母さんが頭の中の天皇、靖国を追い出し頭の中全部を占めている。お母さんと大声で叫びたい。特攻出撃した戦友達も私と同じだと思う。お母さん…

「稲葉候補生肉迫攻撃に出撃します」と壕を飛び出すと同時に、中隊長が「稲葉伏せろ、前方の白旗が見えるか」一週間も前に日本は降伏したと教えるソ連軍の軍使だった。戦争に負けて知った『盡忠報国』『靖国で…』戦争に駆立て傀儡国家建設の巧みな騙し言葉と。生き残った私も、私の戦友達も二度と騙されないと警戒している。靖国にはいない多くの戦友の代弁者になり、二度と騙されたらあかんと、皆さんに警告を発します。



★感謝
レジュメをくださった　語部さんに

★感謝
戦争の愚かさを　寄稿くださった大兄　大姉に
四十六頁の小冊子が　戦争に待ったをかけ
平和を守り通していく　お役にたちます　と

★全ての《核》をなくしたい
クリーンな　水の星　を引き渡したい　それだけです

戦時体験記録集（第十九集）
編集・印刷・発行　戦争体験を語り継ぐ会
発　行　年　月　日　平成二十四年七月七日
発　行　部　数　百　五　十　部